

士 師 記

第一章

第一 人々は主に問うて言った、「わたしたちのうち、だれが先に攻め上って、カナンびとと戦いましょうか」。主は言われた、「ユダが上るべきである。わたしはこの国を彼の手になたした」。ユダはその兄弟シメオンに言った、「わたしと一緒に、わたしに割り当てられた領地へ上って行って、カナンびとと戦ってください。そうすればわたしもあなたと一緒に、あなたに割り当てられた領地へ行きますよう」。そこでシメオンは彼と一緒にに行った。ユダが上って行くと、主は彼らの手にカナンびととペリジびとをわたされたので、彼らはベゼクで一万人を撃ち破り、またベゼクでアドニベゼクに会い、彼と戦ってカナンびととペリジびととを撃ち破った。アドニベゼクは逃げたが、彼らはそのあとを追って彼を捕え、その手足の親指を切り放った。アドニベゼクは言った、「かつて七十人の王たちが手足の親指を切られて、わたしの食卓の下で、くずを拾ったことがあったが、神はわたしがしたように、わたしに報いられたのだ」。人々は彼をエルサレムへ連れて行ったが、彼はそこで死んだ。

ハユダの人々はエルサレムを攻めて、これを取り、つ

るぎをもつてこれを撃ち、町に火を放った。その後、ユダの人々は山地とネゲブと平地に住んでいるカナンびとと戦うために下ったが、ユダはまずヘブロンに住んでいるカナンびとを攻めて、セシヤイとアヒマンとタルマイを撃ち破った。ヘブロンのもとの名はキリアテ・アルバであった。

二 またそこから進んでデビルの住民を攻めた。(デビルのもとの名はキリアテ・セペルであった。) 三 時にカレブは言った、「キリアテ・セペルを撃って、これを取る者には、わたしの娘アクサを妻として与えるであらう」。三 カレブの弟ケナズの子オテニエルがそれを取ったので、カレブは娘アクサを妻として彼に与えた。四 アクサは行くとき彼女の父に畑を求め、夫にすすめられたので、アクサがろばから降りると、カレブは彼女に言った、「あなたは何を望むのか」。五 アクサは彼に言った、「わたしに贈り物をください。あなたはわたしをネゲブの地へやられるのですから、泉をもってください」。それでカレブは上の泉と下の泉とを彼女に与えた。

六 モーセのしゅうとであるケニびとの子孫はユダの人と共に、しゅろの町からアラドに近いネゲブにあるユダの野に上ってきて、アマレクびとと共に住んだ。七 してユダはその兄弟シメオンと共に行って、ゼバテに住んでいたカナンびとを撃ち、それをことごとく滅ぼした。これによってその町の名はホルマと呼ばれた。八 ユダは

またガザとその地域、アシケロンとその地域、エクロンとその地域を取った。一九主がユダと共に取られたので、ユダはついに山地を手に入れたが、平地に住んでいた民は鉄の戦車をもっていたので、これを追いつくことができなかった。二〇人々はモーセがかつて言ったように、ヘブロンをカレブに与えたので、カレブはその所からアナクの三人の子を追いつ出した。二一ベニヤミンの人々はエルサレムに住んでいたエブスびとを追いつ出さなかったもので、エブスびとは今日までベニヤミンの人々と共にエルサレムに住んでいる。

二三ヨセフの一族はまたベテルに攻め上ったが、主は彼らと共に取られた。二四すなわちヨセフの一族は人をやってベテルを探らせた。この町のもとの名はルズであった。二五その斥候たちは町から出てきた人を見て、言った、「どうぞこの町にはいる道を教えてください。そうすればわたしたちはあなたに恵みを施しましょう」。二六彼が町にはいる道を教えたので、彼らはつるぎをもって町を撃った。しかし、かの人とその家族は自由に去らせた。二七その人はヘテびとの地に行つて町を建て、それをルズと名づけた。これは今日までその名である。

二八マナセはベテシヤンとその村里の住民、タアナクとその村里の住民、ドルとその村里の住民、イブレアムとその村里の住民、メギドとその村里の住民を追いつ出さなかったもので、カナンびとは引き続きその地に住んでい

たが、二九イスラエルは強くなったとき、カナンびとを強制労働に服させ、彼らをことごとくは追いつ出さなかった。三〇またエフライムはゲゼルに住んでいたカナンびとを追いつ出さなかったもので、カナンびとはゲゼルにおいて彼らのうちに住んでいた。

三一ゼブルンはキテロンの住民およびナハラルの住民を追いつ出さなかったもので、カナンびとは彼らのうちに住んで強制労働に服した。

三二アセルはアツコの住民およびシドン、アヘラブ、アクジブ、ヘルバ、アピク、レホブの住民を追いつ出さなかったもので、三三アセルびとは、その地の住民であるカナンびとのうちに住んでいた。彼らが追いつ出さなかったからである。

三四ナフタリはベテシメシの住民およびベテアナテの住民を追いつ出さずに、その地の住民であるカナンびとのうちに住んでいた。しかしベテシメシとベテアナテの住民は、ついに彼らの強制労働に服した。

三五アモリびとはダンの人々を山地に追いつ込んで平地に下ることを許さなかった。三六アモリびとは引き続きヘブルヘレス、アヤロン、シャラビムに住んでいたが、ヨセフの一族の手が強くなったので、彼らは強制労働に服した。三七アモリびとの境はアクラビムの坂からセラを経て上の方に及んだ。

第二章 一主の使がギルガルからボキムに上つ

て言った、「わたしはあなたがたをエジプトから上らせ
て、あなたがたの先祖に誓った地に連れてきて、言った、
『わたしはあなたと結んだ契約を決して破ることはない。
二あなたがたはこの国の住民と契約を結んではならない。
彼らの祭壇をこぼたなければならぬ』と。しかし、あ
なたがたはわたしの命令に従わなかった。あなたがたは、
なんということをしたのか。三それでわたしは言う、『わ
たしはあなたがたの前から彼らを追い払わないであろ
う。彼らはかえってあなたがたの敵となり、彼らの神々
はあなたがたのわなとなるであらう』と。四主の使がこ
れらの言葉をイスラエルのすべての人々に告げたので、
民は声をあげて泣いた。五それでその所の名をボキムと
呼んだ。そして彼らはその所で主に犠牲をささげた。

六ヨシユアが民を去らせたので、イスラエルの人々は
おのおのその領地へ行って土地を獲た。七民はヨシユア
の在世中も、またヨシユアのあとに生き残った長老たち、
すなわち主がかつてイスラエルのために行われたすべて
の偉なるわざを見た人々の在世中も主に仕えた。八こ
うして主のしもべマンの子ヨシユアは百十歳で死んだ。
九人々は彼をエフライムの山地のガアシ山の北のテムナ
テ・ヘレスにある彼の領内に葬った。一〇そしてその時
代の者もまたことごとくその先祖たちのもとにあつめら
れた。その後ほかの時代が起ったが、これは主を知らず、
また主がイスラエルのために行われたわざをも知らな

かった。

二イスラエルの人々は主の前に悪を行い、もろもろの
バアルに仕え、三かつてエジプトの地から彼らを導き出
された先祖たちの神、主を捨てて、ほかの神々すなわち
周囲にある国民の神々に従い、それにひざまずいて、主
の怒りをひき起した。四すなわち彼らは主を捨てて、バ
アルとアシタロテに仕えたので、五主の怒りがイスラエ
ルに対して燃え、かすめ奪う者の手にわたして、かすめ
奪わせ、かつ周囲のもろもろの敵の手に売られたので、
彼らは再びその敵に立ち向かうことができなかった。
六彼らがどこへ行っても、主の手は彼らに災をした。こ
れは主がかつて言われ、また主が彼らに誓われたとおり
で、彼らはひどく悩んだ。

七その時、主はさばきづかさを起して、彼らをかすめ
奪う者の手から救い出された。八しかし彼らはそのさば
きづかさにも従わず、かえってほかの神々を慕ってそれ
と姦淫を行い、それにひざまずき、先祖たちが主の命令
に従って歩んだ道を、いちにはやく離れ去って、そのよう
には行わなかった。九主が彼らのためにさばきづかさを
起されたとき、そのさばきづかさの在世中、主はさばき
づかさと共におられて、彼らを敵の手から救い出され
た。これは彼らが自分をしえたげ悩ました者のゆえに、
うめき悲しんだので、主が彼らをあわれまれたからであ
る。一〇しかしさばきづかさが死ぬと、彼らはそむいて、

先祖たちにまさって悪を行い、ほかの神々に従ってそれに仕え、それにひざまずいてそのおこないをやめず、かたくなな道を離れなかった。三〇それで主はイスラエルに對し激しく怒って言われた、「この民はわたしがかつて先祖たちに命じた契約を犯し、わたしの命令に従わないゆえ、三〇わたしもまたヨシユアが死んだときに残しておいた国民を、この後、彼らの前から追ひ払わないであらう。三〇これはイスラエルが、先祖たちの守ったように主の道を守ってそれに歩むかどうかをわたしが試みるためである。三〇それゆえ主はこれらの国民を急いで追ひ払わずに残しておいて、ヨシユアの手になたされなかったのである。

第三章

一すべてカナンのもろもろの戦争を知らないイスラエルの人々を試みるために、主が残しておかれた国民は次のとおりである。二これはただイスラエルの代々の子孫、特にまだ戦争を知らないものに、それを教え知らせるためである。三すなわちペリシテびとの五人の君たちと、すべてのカナンびとと、シドンびとおよびレバノン山に住んで、バアル・ヘルモン山からハマテの入口までを占めていたヒビびとなどであって、四これらをもつてイスラエルを試み、主がモーセによって先祖たちに命じられた命令に、彼らが従うかどうかを知ろうとされたのである。五しかるにイスラエルの人々はカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビび

と、エブスびとのうちに住んで、六彼らの娘を妻にめとり、また自分たちの娘を彼らのむすこに与えて、彼らの神々に仕えた。

七こうしてイスラエルの人々は主の前に悪を行い、自分たちの神、主を忘れて、バアルおよびアシラに仕えた。八そこで主はイスラエルに對して激しく怒り、彼らをメソポタミヤの王クシャン・リシヤタイムの手に売りわたされたので、イスラエルの人々は八年の間、クシャン・リシヤタイムに仕えた。九しかし、イスラエルの人々が主に呼ばわったとき、主はイスラエルの人々のために、ひとりの救助者を起して彼らを救われた。すなわちカレブの弟、ケナズの子オテニエルである。一〇主の霊がオテニエルに臨んだので、彼はイスラエルをさばいた。彼が戦いに出ると、主はメソポタミヤの王クシャン・リシヤタイムをその手にわたされたので、オテニエルの手はクシャン・リシヤタイムに勝ち、二国は四十年のあいだ太平であった。ケナズの子オテニエルはついに死んだ。三イスラエルの人々はまた主の前に悪をおこなった。すなわち彼らが主の前に悪をおこなったので、主はモアブの王エグロンを強めて、イスラエルに敵対させられた。四エグロンはアンモンおよびアマレクの人々を集め、きてイスラエルを撃ち、しゅろの町を占領した。五こうしてイスラエルの人々は十八年の間モアブの王エグロンに仕えた。

二五 しかしイスラエルの人々が主に呼ばわったとき、主は彼らのために、ひとりの救助者を起された。すなわちベニヤミンびと、ゲラの子、左ききのエホデである。イスラエルの人々は彼によつてモアブの王エグロンに、みつぎ物を送った。二六 エホデは長さ一キュビトのもろ刃のつるぎを作らせ、それを衣の下、右のものの上に帯びて、モアブの王エグロンにみつぎ物をもつてきた。エグロンは非常に肥えた人であつた。二七 エホデがみつぎ物をささげ終つたとき、彼はみつぎ物になつてきた民を帰らせ、二八 かれ自身はギルガルに近い石像のある所から引きかえして言った、「王よ、わたしはあなたに申しあげる機密をもつています」。そこで王は「さがつておれ」と言つたので、かたわらに立つてゐる者は皆出て行つた。二九 エホデが王のところにはいつて来ると、王はひとりで涼みの高殿に座してゐたので、エホデが「わたしは神の命によつてあなたに申しあげることがあります」と言つと、王は座から立ちあがつた。三〇 そのときエホデは左の手を伸ばし、右のものもからつるぎをとつて王の腹を刺した。三三 つるぎのつかも刃と共にはいつたが、つるぎを腹から抜き出さなかつたので、脂肪が刃をふさいだ。そして汚物が出た。三二 エホデは廊下に出て、王のおる高殿の戸を閉じ、錠をおろした。

二四 彼が出た後、王のしもべどもがきて、高殿の戸に錠のおろされてあるのを見て、「王はきつと涼み殿のへやで

足をおおつておられるのだ」と思った。二五 しもべどもは長いあいだ待つていたが、王がなほ高殿の戸を開かないので、心配してかぎをとつて開いて見ると、王は床にたおれて死んでゐた。

二六 エホデは彼らのためらうまに、のがれて石像のある所を過ぎ、セイラに逃げていった。二七 彼が行つてエフライムの山地にラツバを吹き鳴らしたので、イスラエルの人々は彼と共に山地から下つてエホデに従つた。二八 エホデは彼らに言った、「わたしについてきなさい。主はあなたがたの敵モアブびとをあなたがたの手にわたされます」。そこで彼らはエホデに従つて下り、ヨルダンの渡し場をおさえ、モアブびとをひとりも渡らせなかつた。二九 そのとき彼らはモアブびとおおよそ一万人を殺した。これはいづれも肥え太つた勇士であつて、ひとりも、のがれた者がなかつた。三〇 こうしてモアブはその日イスラエルの手に服し、国は八十年のあいだ太平であつた。三一 エホデの後、アナテの子シャムガルが起り、牛のむちをもつてペリシテびとと六百人を殺した。この人もまたイスラエルを救つた。

第四章

一 エホデが死んだ後、イスラエルの人々がまた主の前に悪をおこなつたので、二 主は、ハゾルで世を治めていたカナンの王ヤビンの手に彼ら売りわたされた。ヤビンの軍勢の長はハロセテ・ゴイムに住んでゐたシセラであつた。三 彼は鉄の戦車九百両をもち、

二十年の間イスラエルの人々を激しくしえたげたので、イスラエルの人々は主に向かつて呼ばわった。

四 そのころラビドテの妻、女預言者デボラがイスラエルをさばいていた。五 彼女はエフライムの山地のラマとベテルの間にあるデボラのしゅろの木の下に座し、イスラエルの人々は彼女のもとに上ってきて、さばきをうけた。六 デボラは人をつかわして、ナフタリのケデシからアビノアムの子バラクを招いて言った、「イスラエルの神、主はあなたに、こう命じられるではありませんか、『ナフタリの部族とゼブルンの部族から一万人を率い、行つて、タボル山に陣をしけ。七 わたしはヤビンの軍勢の長シセラとその戦車と軍隊とをキシヨン川に引き寄せて、あなたに出あわせ、彼をあなたの手にわたすであらう』。八 バラクは彼女に言った、「あなたがもし一緒に行つてくだされば、わたしは行きます。しかし、一緒に行つてくださらないならば、行きません」。九 デボラは言った、「必ずあなたと一緒にいきます。しかしあなたは今行く道では營を得ないでしょう。主はシセラを女の手になたされるからです」。デボラは立つてバラクと一緒にケデシに行つた。一〇 バラクはゼブルンとナフタリをケデシに呼び集め、一万人を従えて上った。デボラも彼と共に上った。二 時にケニびとヘベルはモーセのしゅろとホバブの子孫であるケニびとから分れて、ケデシに近いザナイムのかしの木までも遠く行つて天幕を張っていた。

一三 アビノアムの子バラクがタボル山に上つたと、人々がシセラに告げたので、一四 シセラは自分の戦車の全部すなわち鉄の戦車九百両と、自分と共にいるすべての民をハロセテ・ゴイムからキシヨン川に呼び集めた。一五 デボラはバラクに言った、「さあ、立ちあがりなさい。きょうは主がシセラをあなたの手にわたされる日です。主はあなたに先立って出られるではありませんか」。そこでバラクは一万人を従えてタボル山から下つた。一六 主はつるぎをもつてシセラとすべての戦車および軍勢をことごとくバラクの前に撃ち敗られたので、シセラは戦車から飛びおり、徒歩で逃げ去つた。一七 バラクは戦車と軍勢とを追撃してハロセテ・ゴイムまで行つた。シセラの軍勢はことごとくつるぎにたおれて、残つたものはひとりもなかった。

一八 しかしシセラは徒歩で逃げ去つて、ケニびとヘベルの妻ヤエルの天幕に行つた。ハゾルの王ヤビンとケニびとヘベルの家とは互にむつまじかつたからである。一九 ヤエルは出てきてシセラを迎え、彼に言った、「おはいりください。主よ、どうぞうちへおはいりください。恐れるにはおよびません」。シセラが天幕にはいつたので、ヤエルは毛布をもつて彼をおおつた。二〇 シセラはヤエルに言った、「どうぞ、わたしに水を少し飲ませてください。のどがかわきましたから」。ヤエルは乳の皮袋を開いて彼に飲ませ、また彼をおおつた。二一 シセラはまたヤエル

に言った、「天幕の入口に立っていてください。もし人がきて、あなたに『だれか、ここにおりますか』と問うならば『おりません』と答えてください」。三しかし彼が疲れて熟睡したとき、ヘベルの妻ヤエルは天幕のくぎを取り、手に槌を携えて彼に忍び寄り、こめかみにくぎを打ち込んで地に刺し通したので、彼は息絶えて死んだ。三バラクがシセラを追ってきたとき、ヤエルは彼を出迎えて言った、「おいでなさい。あなたが求めている人をお見せしましょう」。彼がヤエルの天幕にはいつて見ると、シセラはこめかみにくぎを打たれて倒れて死んでいた。三こうしてその日、神はカナンの王ヤビンにイスラエルの人々の前に撃ち敗られた。二四そしてイスラエルの人の手はますますカナンびとの王ヤビンの上に重くなつて、ついにカナンの王ヤビンを滅ぼすに至つた。

第五章 その日デボラとアビノアムの子バラクは歌つて言った。

二「イスラエルの指導者たちは先に立ち、イスラエルの民は喜び勇んで進み出た。主をさんびせよ。

三もろもろの王よ聞け、耳を傾けよ。もろもろの君よ、耳を傾けよ。

わたしは主に向かつて歌おう、言答を奏せよ。わたしはイスラエルの神、主をほめたたえよう。

四主よ、あなたがセイルを出、

エドムの地から進まれたとき、地は震い、天はしたたり、雲は水をしたたらせた。五もろもろの山は主の前に揺り動き、シナイの主、すなわちイスラエルの神、主の前に揺り動いた。

六アナテの子シヤムガルとき、ヤエルの時には隊商は絶え、旅人はわき道をとった。

七イスラエルには農民が絶え、かれらは絶え果てたが、

デボラよ、ついにあなたは立ちあがり、立つてイスラエルの母となつた。

八人々が新しい神々を選んだとき、戦いは門に及んだ。

イスラエルの四万人のうちに、盾あるいは槍の見られたことがあつたか。

九わたしの心は民のうちの喜び勇んで進み出たイスラエルのつかさたちと共にある。主をさんびせよ。

一〇茶色のろばに乗るもの、毛氈の上にすわるもの、

および道を歩むものよ、共に歌え。

二衆人の調べは水くむ所に聞える。

かれらはそこで主の救を唱え、

イスラエルの農民の救を唱えている。

その時、主の民は門に下って行った。

二 起きよ、起きよ、デボラ。

起きよ、起きよ、歌をうたえ。

立てよ、バラク、とりこを捕えよ、

アビノアムの子よ。

三 その時、残った者は尊い者のように下って行き、

主の民は勇士のように下って行った。

四 彼らはエフライムから出て谷に進み、

兄弟ベニヤミンはあなたの民のうちにある。

マキルからはつかさたちが下って行き、

ゼブルンからは指揮を執るものが下って行った。

五 イッサカルの君たちはデボラと共におり、

イッサカルはバラクと同じく、

直ちにそのあとについて谷に突進した。

しかしルベンの氏族は大いに思案した。

六 なぜ、あなたは、おりの間にとどまって、

羊の群れに笛吹くのを聞いているのか。

ルベンの氏族は大いに思案した。

七 ギレアデはヨルダンの向こうにとどまっていた。

なぜ、ダンは舟のかたわらにとどまったか。

アセルは浜べに座し、

その波止場のかたわらにとどまっていた。

一八 ゼブルンは命をすてて、死を恐れぬ民である。

野の高い所におけるナフタリもまたそうであった。

一九 もろもろの王たちはきて戦った。

その時カナン王たちは、

メギドの水のほとりのタアナクで戦った。

彼らは一片の銀をも獲なかった。

三〇 もろもろの星は天より戦い、

その軌道をはなれてシセラと戦った。

三キシヨンの川は彼らを押し流した、

激しく流れる川、キシヨンの川。

わが魂よ、勇ましく進め。

三三 その時、軍馬ははせ駆けり、

馬のひずめは地を踏みならした。

三三 主の使は言った、『メロズをのろえ、

激しくその民をのろえ、

彼らはきて主を助けず、

主を助けて勇士を攻めなかったからである。』

三四 ケニびとへベルの妻ヤエルは、

女のうちの最も恵まれた者、

天幕に住む女のうち最も恵まれた者である。

三五 シセラが水を求めると、ヤエルは乳を与えた。

すなわち貴重な鉢に凝乳を盛ってささげた。

三六 ヤエルはくぎに手をかけ、

右手に重い槌をとって、

シセラを打ち、その頭を碎き、粉々にして、そのこめかみを打ち貫いた。

三六 シセラはヤエルの足もとにかがんで倒れ伏し、その足もとにかがんで倒れ、

そのかがんだ所に倒れて死んだ。

三七 シセラの母は窓からながめ、

格子窓から叫んで言った、

『どうして彼の車の来るのがおそいのか、

どうして彼の車の歩みがかどらないのか』。

三八 その侍女たちの賢い者は答へ、

母またみずからおのれに答えて言った、

三九 『彼らは獲物を得て、

それを分けてゐるのではないか、

人ごとにひとり、ふたりのおなごを取り、

シセラの獲物は色染めの衣、

縫い取りした色染めの衣の獲物であろう。

すなわち縫い取りした色染めの衣二つを、

獲物としてそのくびにまとうであろう』。

四〇 主よ、あなたの敵はみなこのように滅び、

あなたを愛する者を

太陽の勢いよく上るようになってください。

こうして後、国は四十年のあいだ太平であった。

第六章 イスラエルの人はまた主の前に悪

をおこなったので、主は彼らを七年の間ミデアンびとの

手にわたされた。ミデアンびとの手はイスラエルに勝った。イスラエルの人はミデアンびとのゆえに、山にある岩屋と、ほら穴と要害とを自分たちのために造った。ミデアンびとが種をまいた時には、いつもミデアンびと、アマレクびとおよび東方の民が上ってきてイスラエルびとを襲い、イスラエルびとに向かって陣を取り、地の産物を荒してガザの附近にまで及び、イスラエルのうちに命をつなぐべき物を残さず、羊も牛もろばも残さなかった。五 彼らが家畜と天幕を携えて、いなごのように多く上ってきたからである。すなわち彼らとそれのらくだは無数であつて、彼らは国を荒すためにはいつてきたのであつた。六 こうしてイスラエルはミデアンびとのために非常に衰へ、イスラエルの人は主に呼ばわった。

七 イスラエルの人々がミデアンびとのゆえに、主に呼ばわったとき、主はひとりの預言者をイスラエルの人につかわして彼らに言われた、「イスラエルの神、主はこう言われる、『わたしはかつてあなたがたをエジプトから導き上り、あなたがたを奴隸の家から携へ出し、九 エジプトびとの手およびすべてあなたがたをしえたげる者の手から救ひ出し、あなたがたの前から彼らを追い払つて、その国をあなたがたに与えた。一〇 そしてあなたがたに言った、『わたしはあなたがたの神、主である。あなたがたが住んでいる国のアモリびとの神々を恐れてはなら

ない」と。しかし、あなたがたはわたしの言葉に従わなかった』。

二 さて主の使がきて、アビエゼルびとヨアシに属するオフラにあるテレピンの木の下に座した。時にヨアシの子ギデオンはミデアンびとの目を避けるために酒ぶねの中で麦を打っていたが、三 主の使は彼に現れて言った、「大勇士よ、主はあなたと共におられます」。四 ギデオンは言った、「ああ、君よ、主がわたしたちと共におられるならば、どうしてこれらの事がわたしたちに臨んだのでしょうか。わたしたちの先祖が『主はわれわれをエジプトから導き上られたではないか』といって、わたしたちに告げたそのすべての不思議なみわざはどこにありますか。今、主はわたしたちを捨てて、ミデアンびとの手にわたされました」。五 主はふり向いて彼に言われた、「あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか」。六 ギデオンは主に言った、「ああ主よ、わたしはどうしてイスラエルを救うことができますでしょうか。わたしの氏族はマナセのうちで最も弱いものです。わたしはまたわたしの父の家族のうちで最も小さいものです」。七 主は言われた、「しかし、わたしがあなたと共にいるから、ひとり撃つようにミデアンびとを撃つことができるでしょう」。八 ギデオンはまた主に言った、「わたしはもしあなたの前に恵みを得てい

ますならば、どうぞ、わたしと語るのがあなたであるというしるしを見せてください」。九 どうぞ、わたしが供え物を携えてあなたのもとにもどってきて、あなたの前に供えるまで、ここを去らないでください」。主は言われた、「わたしはあなたがもどって来るまで待ちましょう」。一〇 そこでギデオンは自分の家に行つて、やぎの子を整え、一エバの粉で種入れぬパンをつくり、肉をかごに入れた。あつものをつぼに盛り、テレピンの木の下におる彼のもとに持ってきて、それを供えた。一一 神の使は彼に言った、「肉と種入れぬパンをとって、この岩の上に置き、それにあつものを注ぎなさい」。彼はそのようにした。一二 すると主の使が手にもつていたつえの先を出して、肉と種入れぬパンに触れると、岩から火が燃えあがつて、肉と種入れぬパンとを焼きつくした。そして主の使は去つて見えなくなった。一三 ギデオンはその人が主の使であつたことをさとして言った、「ああ主なる神よ、どうなることでしょうか。わたしは顔をあわせて主の使を見たのですから」。一四 主は彼に言われた、「安心せよ、恐れるな。あなたは死ぬことはない」。一五 そこでギデオンは主のために祭壇をそこに築いて、それを「主は平安」と名づけた。これは今日までアビエゼルびとのオフラにある。一六 その夜、主はギデオンに言われた、「あなたの父の雄牛と七歳の第二の雄牛とを取り、あなたの父のもっているバアルの祭壇を打ちこわし、そのかたわらにあるアシ

ラ像を切り倒し、二六あなたの神、主のために、このとりでの頂に、石を並べて祭壇を築き、第二の雄牛を取り、あなたが切り倒したアシラの木をもって燔祭をささげなさい。二七ギデオンはしもべ十人を連れて、主が言われたとおりにおこなった。ただし彼は父の家族のもの、および町の人々を恐れたので、昼それを行うことができず、夜それを行った。

二八町の人々が朝早く起きて見ると、バアルの祭壇は打ちこわされ、そのかたわらのアシラ像は切り倒され、新たに築いた祭壇の上に、第二の雄牛がささげられてあった。二九そこで彼らは互に「これはだれのしわざか」と言っていて問い尋ねたすえ、「これはヨアシの子ギデオンのしわざだ」と言った。三〇町の人々はヨアシに言った、「あなたのむすこを引き出して殺しなさい。彼はバアルの祭壇を打ちこわしそのかたわらにあったアシラ像を切り倒したのです。三十一しかしヨアシは自分に向かつて立っているすべての者に言った、「あなたがたはバアルのために言い争うのですか。あるいは彼を弁護しようとなさるのですか。バアルのために言い争う者は、あすの朝までに殺されるでしょう。バアルがもし神であるならば、自分の祭壇が打ちこわされたのだから、彼みずから言い争うべきです。三十二そこでその日、「自分の祭壇が打ちこわされたのだから、バアルみずからその人と言い争うべきです」と言ったので、ギデオンはエルバアルと呼ばれた。

三三時にミデアンびと、アマレクびとおよび東方の民がみな集まってヨルダン川を渡り、エズレルの谷に陣を取ったが、三四主の霊がギデオンに臨み、ギデオンがラツパを吹いたので、アビエゼルびとは集まって彼に従った。三五次に彼がたまねくマナセに使者をつかわしたので、マナセびともまた集まって彼に従った。彼がまたアセル、ゼブルンおよびナフタリに使者をつかわすと、その人々も上って彼を迎えた。

三六ギデオンは神に言った、「あなたがかつて言われたように、わたしの手によってイスラエルを救おうとされるならば、三七わたしは羊の毛一頭分を打ち場に置きますから、露がその羊の毛の上にだけあって、地がすべてかわいていくようにしてください。これによってわたしは、あなたがかつて言われたように、わたしの手によってイスラエルをお救いになることを知るでしょう。三八すなわちそのようになった。彼が翌朝早く起きて、羊の毛をかき寄せ、その毛から露を絞ると、鉢に満ちるほどの水が出た。三九ギデオンは神に言った、「わたしをお怒りにならないように願います。わたしにもう一度だけ言わせてください。どうぞ、もう一度だけ羊の毛をもってためさせてください。どうぞ、羊の毛だけをかわかして、地にはことごとく露があるようにしてください。四〇神はその夜、そうされた。すなわち羊の毛だけかわいて、地にはすべて露があった。

第七 章

一 さてエルバアルと呼ばれるギデオン
および彼と共にいたすべての民は朝早く起き、ハロデの
泉のほとりに陣を取った。ミデアンびとの陣は彼らの北
の方にあり、モレの丘に沿って谷の中にあつた。三百人

二 主はギデオンに言われた、「あなたと共にある民はあ
まりに多い。ゆえにわたしは彼らの手にミデアンびとを
わたさない。おそろくイスラエルはわたしに向かつてみ
ずから誇り、『わたしは自身の手で自分を救ったのだ』と
言うであらう。三 それゆえ、民の耳に触れ示して、『だれ
でも恐れおののく者は帰れ』と言いなさい。こうして
ギデオンは彼らを試みたので、民のうち帰った者は二万
二千人あり、残った者は一万人であつた。

四 主はまたギデオンに言われた、「民はまだ多い。彼ら
を導いて水ぎわに下りなさい。わたしはそこで、あなた
のために彼らを試みよう。わたしがあなたに告げて『こ
の人はあなたと共に行くべきだ』と言う者は、あなたと
共に行くべきである。またわたしがあなたに告げて『こ
の人はあなたと共に行くにはならない』と言う者は、だ
れも行つてはならない。五 そこでギデオンが民を導いて
水ぎわに下ると、主は彼に言われた、『すべて犬のなめる
ように舌をもつて水をなめる者はそれを別にしておきな
さい。またすべてひざを折り、かがんで水を飲む者もそ
うしなさい。六 そして手を口にあてて水をなめた者の数
は三百人であつた。残りの民はみなひざを折り、かがん

で水を飲んだ。七 主はギデオンに言われた、『わたしは水
をなめた三百人の者をもつて、あなたがたを救い、ミデ
アンびとをあなたの手にわたそう。残りの民はおのおの
その家に帰らせなさい。八 そこで彼はかの三百人を留め
おき、残りのイスラエルびとの手から、つぼとラツパを
取り、民をおのおのその天幕に帰らせた。時にミデア
ンびとの陣は下の谷の中にあつた。

九 その夜、主はギデオンに言われた、『立てよ、下つて
いつて敵陣に攻め入れ。わたしはそれをあなたの手にわ
たす。一〇 もしあなたが下つて行くことを恐れるならば、
あなたのしもべプラと共に敵陣に下つていつて、二 彼ら
の言うところを聞け。そうすればあなたの手が強くなつ
て、敵陣に攻め下ることができるようである。ギデオン
がしもべプラと共に下つて、敵陣にある兵隊たちの前哨
地点に行つてみると、三 ミデアンびと、アマレクびと
およびすべての東方の民はいなごのように数多く谷に沿つ
て伏していた。そのらくだは海べの砂のように多くて数
えきれなかつた。四 ギデオンがそこへ行つたとき、ある
人がその仲間に夢を語つていた。その人は言つた、『わた
しは夢を見た。大麦のパン一つがミデアンの陣中にころ
がってきて、天幕に達し、それを打ち倒し、くつがえし
たので、天幕は倒れ伏した。五 仲間は答えて言つた、
『それはイスラエルの人、ヨアシの子ギデオンのつるぎ
にちがいない。神はミデアンとすべての軍勢を彼の手に

わたされるのだ」。

「五ギデオンは夢の物語とその解き明かしとを聞いたので、礼拝し、イスラエルの陣営に帰り、そして言った、「立てよ、主はミデアンの軍勢をあなたがたの手にわたされる」。一六そして彼は三百人を三組に分け、手に手にラッパと、からつぽとを取らせ、つぽの中にたいまつをともさせ、一七彼らに言った、「わたしを見て、わたしのするようにしなさい。わたしが敵陣のはずれに達したとき、あなたがたもわたしのするようにしなさい。一八わたしと共にいる者がみなラッパを吹くと、あなたがたもまたすべての陣営の四方でラッパを吹き、『主のためだ、ギデオンのためだ』と言いなさい」。

一九こうしてギデオンと、彼と共にいた百人の者が、中更の初めに敵陣のはずれに行ってみると、ちょうど番兵を交代した時であったので、彼らはラッパを吹き、手に携えていたつぽを打ち砕いた。二〇すなわち三組の者がラッパを吹き、つぽを打ち砕き、左の手にはたいまつをとり、右の手にはラッパを持ってそれを吹き、「主のためにつるぎ、ギデオンのためのつるぎ」と叫んだ。三そしておのおのその持ち場に立ち、敵陣を取り囲んだので、敵軍はみな走り、大声をあげて逃げ去った。三三三百人のものがラッパを吹くと、主は敵軍をしてみな互に同志打ちさせられたので、敵軍はゼレラの方、ベテシツタおよびアベルメホラの境、タバテの近くまで逃げ去った。三三イ

スラエルの人々はナフタリ、アセルおよび全マナセから集まってきて、ミデアンびとを追撃した。

二四ギデオンは使者をあまねくエフライムの山地につかわし、「下ってきて、ミデアンびとを攻め、ベタバラに至るまでの流れを取り、またヨルダンをも取れ」と言わせた。そこでエフライムの人々はみな集まってきて、ベタバラに至るまでの流れを取り、またヨルダンをも取った。二五彼らはまたミデアンびとのふたりの君オレブとゼエブを捕え、オレブをオレブ岩のほとりで殺し、ゼエブをゼエブの酒ぶねのほとりで殺した。またミデアンびとを追撃し、オレブとゼエブの首を携えてヨルダンの向こうのギデオンのもとへ行った。

第八章 エフライムの人々はギデオンに向か

い、「あなたが、ミデアンびとと戦うために行かれたとき、われわれを呼ばれなかったが、どうしてそういうことをされたのですか」と言って激しく彼を責めた。二ギデオンは彼らに言った、「今わたしのした事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか。エフライムの拾い集めた取り残りのぶどうはアビエゼルの収穫したぶどうにもまさるではありませんか。三神はミデアンの君オレブとゼエブをあなたがたの手にわたされました。わたしのなし得た事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか。四ギデオンがこの言葉を述べると、彼らの憤りは解けた。

四ギデオンは自分に従っていた三百人と共にヨルダンに行つてこれを渡り、疲れたながらも追撃したが、五彼はスコテの人々に言った、「どうぞわたしに従っている民にパンを与えてください。彼らが疲れているのに、わたしはミデアンの王ゼバとザルムンナを追撃しているのですから」。六スコテのつかさたちは言った、「ゼバとザルムンナは、すでにあなたの手のうちにあるのですか。われわれはどうしてあなたの軍勢にパンを与えねばならないのですか」。七ギデオンは言った、「それならば主がわたしの手にゼバとザルムンナをわたされるとき、わたしは野のいばらと、おどろをもつて、あなたがたの肉を打つであらう」。八そしてギデオンはそこからベヌエルに上り、同じことをベヌエルの人々に述べると、彼らもスコテの人々が答えたように答えたので、九ベヌエルの人々に言った、「わたしが安らかに帰ってきたとき、このやぐらを打ちこわすであらう」。

一〇さてゼバとザルムンナは軍勢およそ一万五千人を率いて、カルコルにいた。これは皆、東方の民の全軍のうち生き残ったもので、戦死した者は、つるぎを帯びているものが十二万人あった。二ギデオンはノバとヨグベハの東の隊商の道を上つて、敵軍の油断しているところを撃った。三ゼバとザルムンナは逃げたが、ギデオンは追撃して、ミデアンのふたりの王ゼバとザルムンナを捕え、その軍勢をことごとく撃ち敗った。

二三こうしてヨアシの子ギデオンはヘレスの坂をとおつて戦いから帰り、二四スコテの若者ひとりをつかまえて、尋ねたところ、彼はスコテのつかさたち及び長老たち七十七人の名をギデオンのために書きしるした。二五ギデオンはスコテの人々のところへ行つて言った、「あなたがたがつて『ゼバとザルムンナはすでにあなたの手のうちにあるのか。われわれはどうしてあなたの疲れた人々にパンを与えねばならないのか』と云つて、わたしをののしつたそのゼバとザルムンナを見なさい」。二六そして彼は、その町の長老たちを捕え、野のいばらと、おどろとを取り、それをもつてスコテの人々を懲らし、二七またベヌエルのやぐらを打ちこわして町の人々を殺した。

二八そしてギデオンはゼバとザルムンナに言った、「あなたがたがタボルで殺したのは、どんな人々であつたか」。彼らは答えた、「彼らはあなたに似てみな王子のように見えました」。二九ギデオンは言った、「彼らはわたしの兄弟、わたしの母の子たちだ。主は生きておられる。もしあなたがたが彼らを生かしておいたならば、わたしはあなたがたを殺さないのだが」。三〇そして長子エテルに言った、「立つて、彼らを殺しなさい」。しかしその若者はなお年が若かったので、恐れてつるぎを抜かなかった。三そこでゼバとザルムンナは言った、「あなた自身を立て、わたしたちを撃ってください。人によってそれぞれ力も違いますから」。ギデオンは立ちあがってゼバとザルムン

ナを殺し、彼らのらくだの首に掛けてあつた月形の飾りを取った。

三 イスラエルの人々はギデオンに言った、「あなたはミデアンの手からわれわれを救われたのですから、あなたも、あなたの子も孫もわれわれを治めてください」。三三 ギデオンは彼らに言った、「わたしはあなたを治めることとはいたしません。またわたしの子もあなたを治めることとはなりません。主があなたがたを治められます」。三四 ギデオンはまた彼らに言った、「わたしはあなたがたに一つの願ひがあります。あなたがたのぶんどった耳輪を、めいめいわたしにください」。ミデアンびとはイシマエルびとであつたゆえに、金の耳輪を持っていたからである。三五 彼らは答えた、「わたしどもは喜んでそれをさしあげます」。そして衣をひろげ、めいめいぶんどった耳輪をその中に投げ入れた。三六 こうしてギデオンが求めて得た金の耳輪の重さは一千七五金シケルであつた。ほかに月形の飾りと耳飾りと、ミデアンの王たちの着た紫の衣およびらくだの首に掛けた首飾りなどもあつた。三七 ギデオンはそれをもつて一つのエポデを作り、それを自分の町オフラに置いた。イスラエルは皆それを慕つて姦淫をおこなつた。それはギデオンとその家にとって、わなとなつた。三八 このようにしてミデアンはイスラエルの人々に征服されて、再びその頭をあげることはできなかつた。そして国はギデオンの世にあるうち、四十年のあい

だ太平であつた。

二九 ヨアシの子エルバアルは行つて自分の家に住んだ。三〇 ギデオンは多くの妻をもつていたので、自分の子供だけで七十人あつた。三一 シケムにいた彼のめかけがまたひとりの子を産んだので、アビメレクと名づけた。三二 ヨアシの子ギデオンは高齢に達して死に、アビエゼルびとのオフラにある父ヨアシの墓に葬られた。

三三 ギデオンが死ぬと、イスラエルの人々はまたバアルを慕つて、これと姦淫を行い、バアル・ペリテを自分たちの神とした。三四 すなわちイスラエルの人々は周囲のもろもろの敵の手から自分たちを救われた彼らの神、主を覚え、三五 またエルバアルすなわちギデオンがイスラエルのためにしたもろもろの善行に応じて彼の家族に親切をつくすこともしなかつた。

第九章

一 さてエルバアルの子アビメレクはシケムに行き、母の身内の人たちのもとに行つて、彼らと母の父の家の一族とに言った、「三 どうぞ、シケムのすべての人々の耳に告げてください、『エルバアルのすべての子七十人であなただがたを治めるのと、ただひとりであなただがたを治めるのと、どちらがよいか。わたしがあなたごたの骨肉であることを覚えてください』と」。三二 そこで母の身内の人たちがアビメレクに代つてこれらの言葉をことごとくシケムのすべての人々の耳に告げると、彼らは心をアビメレクに傾け、「彼はわれわれの兄弟だ」と

言^いつて、四^四バアル・ベリテの宮^{みや}から銀七十シケルを取^とつて彼^{かれ}に与^{あた}えた。アビメレクはそれをもつて、やくざのならず者^{もの}を雇^{やと}つて自分^{じぶん}に従^{したが}わせ、五^五オフラにある父^{ちち}の家^{いえ}に行^いつて、エルバアルの子^こで、自分の兄弟^{きょうだい}である七十人^{にん}を、一つの石^{いし}の上^{うへ}で殺^{ころ}した。ただしエルバアルの末^{すえ}の子^こヨタムは身^みを隠^{かく}したので生き残^{のこ}った。六^六そこでシケムのすべての人々^{ひとびと}とベテミロのすべての人々^{ひとびと}は集^{あつ}まり、行^いつてシケムにある石^{いし}の柱^{はしら}のかたわらのテレピンの木^きのもとで、アビメレクを立てて王^{おう}とした。

七^七このことをヨタムに告^つげる者^{もの}があつたので、ヨタムは行^いつてゲリジム山^{やま}の頂^{いた}に立^たち、大^{おお}声^{こゑ}に叫^{さけ}んで彼^{かれ}らに言^いつた、「シケムの人々^{ひとびと}よ、わたしに聞^ききなさい。そうすれば神^{かみ}はあなたがたに聞^きかれるでしょう。八^八ある時^{とき}、もろもろの木^きが自分^{じぶん}たちの上^{うへ}に王^{おう}を立てようと出^でて行^いつてオリブの木^きに言^いつた、『わたしたちの王^{おう}になつてください』。九^九しかしオリブの木^きは彼^{かれ}らに言^いつた、『わたしはどうして神^{かみ}と人^{ひと}とをあがめるために用^{もち}いられるわたしの油^{あぶら}を捨^すてて行^いつて、もろもろの木^きを治^{おさ}めることができましよう』。一〇もろもろの木^きはまたいちじくの木^きに言^いつた、『きてわたしたちの王^{おう}になつてください』。一一しかしいちじくの木^きは彼^{かれ}らに言^いつた、『わたしはどうしてわたしの甘^{かん}味^みと、わたしの良^よい果^か実^{じつ}とを捨^すてて行^いつて、もろもろの木^きを治^{おさ}めることができましよう』。一二もろもろの木^きはまたぶどうの木^きに言^いつた、『きてわたしたちの王^{おう}になつてくだ

さい』。一三しかし、ぶどうの木^きは彼^{かれ}らに言^いつた、『わたしはどうして神^{かみ}と人^{ひと}とを喜^{よろこ}ばせるわたしのぶどう酒^{しゅ}を捨^すてて行^いつて、もろもろの木^きを治^{おさ}めることができましよう』。一四そこですべての木^きはいばらに言^いつた、『きてわたしたちの王^{おう}になつてください』。一五いばらはもろもろの木^きに言^いつた、『あなたがたが真^{しん}実^{じつ}にわたしを立てて王^{おう}にするならば、きてわたしの陰^{かげ}に難^{なん}を避^さけなさい。そうしなければ、いばらから火^ひが出てレバノンの香^{かう}柏^{はく}を焼^やきつくすでしょう』。

一六あなたがたがアビメレクを立てて王^{おう}にしたことは、真^{しん}実^{じつ}と敬^{けい}意^いとをもつてしたものです。一七あなたがたはエルバアルとその家^{いえ}をよく扱^{あつか}い、彼^{かれ}のおこないに応^{おう}じてしたのですか。一八わたしの父^{ちち}はあなたがたのために戦^{たたか}い、自分の命^{いのち}を投^なげ出^だして、あなたがたをミデアンの手^てから救^{すく}い出したのに、一九あなたがたは、きよう、わたしの父^{ちち}の家^{いえ}に反^{はん}抗^{かう}して起^{おこ}り、その子^こ七十人^{にん}を一つの石^{いし}の上^{うへ}で殺^{ころ}し、その腰^{こし}元^{もと}の子^こアビメレクをあなたがたの身^み内^{うち}の者^{もの}であるゆえに立^たてて、シケムの人々^{ひとびと}の王^{おう}にしました。二〇あなたがたが、きよう、エルバアルとその家^{いえ}になされたこととが真^{しん}実^{じつ}と敬^{けい}意^いをもつてしたものであるならば、アビメレクのために喜^{よろこ}びなさい。彼^{かれ}もまたあなたがたのために喜^{よろこ}ぶでしょう。二一しかし、そうでなければ、アビメレクから火^ひが出て、シケムの人々^{ひとびと}とベテミロとを焼^やきつくし、またシケムの人々^{ひとびと}とベテミロからも火^ひが出てアビメレク

を焼きつくすでしょう。三こうしてヨタムは走って逃げ去り、ベエルに行き、兄弟アビメレクの顔をさけてそこに住んだ。

三アビメレクは三年の間イスラエルを治めたが、三神はアビメレクとシケムの人々の間に悪霊をおくられたので、シケムの人々はアビメレクを欺くようになった。二四これはエルバアルの七十人の子が受けた暴虐と彼らの血が、彼らを殺した兄弟アビメレクの上と、彼の手を強めてその兄弟を殺させたシケムの人々の上とに報いとなってきたのである。二五シケムの人々は彼に敵して待ち伏せする者を山々の頂におき、すべてその道を通り過ぎる者を略奪させた。このことがアビメレクに告げ知らされた。

二六さてエベデの子ガアルはその身内の人々と一緒にシケムに移住したが、シケムの人々は彼を信用した。二七人は煙に出てぶどうを取り入れ、それを踏み絞って祭をし、神の宮に行つて飲み食いしてアビメレクをのろつた。二八そしてエベデの子ガアルは言った、「アビメレクは何ものか。シケムのわれわれは何ものなれば彼に仕えなければならぬのか。エルバアルの子とその役人ゼブルはシケムの先祖ハモルの一族に仕えたではないか。われわれはどうして彼に仕えなければならぬのか。二九ああ、この民がわたしの手の下にあつたらよいのだが。そうすればわたしはアビメレクをやめさせ、アビメレクに向か

て『おまえの軍勢を増して出てこい』と言うであらう。

三〇町のつかさゼブルはエベデの子ガアルの言葉を聞いて怒りを発し、三使者をアルマにおけるアビメレクにつかわして言わせた、「エベデの子ガアルとその身内の人々がシケムにきて、町を騒がせ、あなたにそむかせようとしています。三三それであなたと、あなたと共にいる人々が夜のうちに、野に身を伏せ、三三朝になって、日のぼるとき、早く起き出て町を襲うならば、ガアルと、彼と共にいる民は出てきて、あなたに抵抗するでしょう。その時あなたは機を得て、彼らを撃つことができるでしょう。

三四アビメレクと、彼と共にいたすべての民は夜のうちに起き出て、四組に分れ、身を伏せてシケムをうかがつた。三五エベデの子ガアルが出て、町の門の入口に立つたとき、アビメレクと、彼と共にいた民が身を伏せていたところから立ちあがったので、三六ガアルは民を見てゼブルに言った、「ごらんさい。民が山々の頂からおりてきます。ゼブルは彼に言った、「あなたは山々の影を人のように見るのです。三七ガアルは再び言った、「ごらんさい。民が国の中央部からおりてきます。一組は占い師のテレビンの木の方からきます。三八ゼブルは彼に言った、「あなたがかつて『アビメレクは何ものか。われわれは何ものなれば彼に仕えなければならぬのか』と言つたあなたの口は今どこにありますか。これはあなたが

悔った民ではありませんか。今、出て彼らと戦いなさい。三九そこでガアルはシケムの人々を率い、出てアビメレクと戦ったが、四〇アビメレクは彼を追ったので、ガアルは彼の前から逃げた。そして傷つき倒れる者が多く、ガアルの入口にまで及んだ。四一こうしてアビメレクは引き続いてアルマにいたが、ゼブルはガアルとその身内の人々を追いつ出してシケムにおらせなかった。

四二翌日、民が畑に出ると、そのことがアビメレクに聞えた。四三アビメレクは自分の民を率い、それを三組に分け、野に身を伏せて、うかがっていると、民が町から出てきたので、たちあがってこれを撃った。四四アビメレクと、彼と共にいた組の者は襲って行って、町の門の入口に立ち、他の二組は野にいたすべてのものを襲って、それを殺した。四五アビメレクはその日、終日、町を攻め、ついに町を取って、そのうちの民を殺し、町を破壊して、塩をまいた。

四六シケムのやぐらの人々は皆これを聞いて、エルベリテの宮の塔にはいった。四七シケムのやぐらの人々が皆集まったことがアビメレクに聞えたので、四八アビメレクは自分と一緒にいた民をことごとく率いてザルモン山にのぼり、アビメレクは手におのを取って、木の枝を切り落し、それを取りあげて自分の肩にのせ、一緒にいた民にむかって言った、「あなたがたはわたしが見たこととおりに急いでしなさい」。四九そこで民もまた皆おの

のその枝を切り落し、アビメレクに従って行って、枝を塔によせかけ、塔に火をつけて彼らを攻めた。こうしてシケムのやぐらの人々もまたことごとく死んだ。男女おおよそ一千人であった。

五〇ついでアビメレクはテベツに行き、テベツに向かつて陣を張り、これを攻め取ったが、五一町の中に一つの堅固なやぐらがあつて、すべての男女すなわち町の人々が皆そこに逃げ込み、あとを閉ざして、やぐらの屋根に上ったので、五二アビメレクはやぐらのもとに押し寄せてこれを攻め、やぐらの入口に近づいて、火をつけて焼こうとしたとき、五三ひとりの女がアビメレクの頭に、うすの上石を投げて、その頭骸骨を砕いた。五四アビメレクは自分の武器を持つ若者を急ぎ呼んで言った、「つるぎを抜いてわたしを殺せ。さもないと人々はわたしを、女に殺されたのだと言うであらう」。その若者が彼を刺し通したので彼は死んだ。五五イスラエルの人々はアビメレクの死んだのを見て、おのおの去って家に帰った。五六このように神はアビメレクがその兄弟七十人を殺して、自分の父に対して犯した悪に報いられた。五七また神はシケムの人々のすべての悪を彼らのこうべに報いられた。こうしてエルバアルの子ヨタムののろいが、彼らに臨んだのである。

第一章 ○アビメレクの後、イツサカルの人で、ドドの子であるブワの子トラが起つてイスラエルを救っ

た。彼はエフライムの山地のシャミルに住み、二十三年の間イスラエルをさばいたが、ついに死んでシャミルに葬られた。

三彼の後にギレアデびとヤイルが起つて二十二年の間イスラエルをさばいた。四彼に三十人の子があつた。彼らは三十頭のろばに乗り、また三十の町をもっていた。ギレアデの地で今日まで、ハボテ・ヤイルと呼ばれてゐるものがそれである。五ヤイルは死んで、カモンに葬られた。

六イスラエルの人々は再び主の前に悪を行い、バアルとアシタロテおよびスリヤの神々、シドンの神々、モアブの神々、アンモンびとの神々、ペリシテびとの神々に仕え、主を捨ててこれに仕えなかつた。七主はイスラエルに対して怒りを発し、彼らをペリシテびとの手およびアンモンびとの手に売りわたされたので、八彼らはその年イスラエルの人々をしえたげ悩ました。すなわち彼らはヨルダンの向こうのギレアデにあるアモリびとの地にいたすべてのイスラエルびとを十八年のあいだ悩ました。九またアンモンの人々がユダとベニヤミンとエフラムの氏族を攻めるためにヨルダンを渡つてきたので、イスラエルは非常に悩まされた。

一〇そこでイスラエルの人々は主に呼ばわつて言った、「わたしたちはわたしたちの神を捨ててバアルに仕え、あなたに罪を犯しました」。一一主はイスラエルの人々に言

われた、「わたしはかつてエジプトびと、アモリびと、アンモンびと、ペリシテびとからあなたがたを救ひ出したではないか。三またシドンびと、アマレクびとおよびマオンびとがあなたがたをしえたげた時、わたしに呼ばわつたので、あなたがたを彼らの手から救ひ出した。三しかしあなたがたはわたしを捨てて、ほかの神々に仕えた。それゆえ、わたしはかきねてあなたがたを救ひないであらう。四あなたがたが選んだ神々に行つて呼ばわり、あなたがたの悩みの時、彼らにあなたがたを救はせるがよい」。五イスラエルの人々は主に言った、「わたしたちは罪を犯しました。なんでもあなたが良いと思われ

ることをしてください。ただどうぞ、きょう、わたしたちを救ってください」。六そうして彼らは自分たちのうちから異なる神々を取り除いて、主に仕えた。それで主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなつた。七時にアンモンの人々は召集されてギレアデに陣を取つたが、イスラエルの人々は集まつてミヅバに陣を取つた。八その時、民とギレアデの君たちとは互に言った、「だれがアンモンの人々に向かつて戦いを始めるか。その人はギレアデのすべての民のかしらとなるであらう」。

第一章 一さてギレアデびとエフタは強い勇士であつたが遊女の子で、エフタの父はギレアデであつた。ニギレアデの妻も子供を産んだが、その妻の子供たちが

成長したとき、彼らはエフタを追い出して彼に言った、「あなたはほかの女の産んだ子だから、わたしたちの父の家を継ぐことはできません」。それでエフタはその兄弟たちのもとから逃げ去って、トブの地に住んでいると、やくざ者がエフタのもとに集まってきて、彼と一緒に出てかけて略奪を事としていた。

四 日がたつて後、アンモンの人々はイスラエルと戦うことになり、五 アンモンの人々がイスラエルと戦ったとき、ギレアデの長老たちは行ってエフタをトブの地から連れてこようとして、六 エフタに言った、「きて、わたしたちの大将になってください。そうすればわたしたちはアンモンの人々と戦うことができます」。七 エフタはギレアデの長老たちに言った、「あなたはわたしを憎んで、わたしの父の家から追い出したではありませんか。しかるに今あなたがたが困っている時とはいえ、わたしのところに来るとはどういうわけですか」。八 ギレアデの長老たちはエフタに言った、「それでわたしたちは今、あなたに帰ったのです。どうぞ、わたしたちと一緒に行って、アンモンの人々と戦ってください。そしてわたしたちとギレアデに住んでいるすべてのもののかしらになってください」。九 エフタはギレアデの長老たちに言った、「もしあなたがたが、わたしをつれて帰って、アンモンの人々と戦わせるとき、主が彼らをわたしにわたされるならば、わたしはあなたがたのかしらとなりましょう」。一〇 ギレ

アデの長老たちはエフタに言った、「主はあなたとわたしたちの間の証人です。わたしたちは必ずあなたの言われるとおりにしましょう」。二 そこでエフタはギレアデの長老たちと一緒に行った。民は彼を立てて自分たちのかしらとし、大将とした。それでエフタはミヅバで、自分の言葉をことごとく主の前に述べた。

三 かくてエフタはアンモンの人々の王に使者をつかわして言った、「あなたはわたしとなんのかかわりがあつて、わたしのところへ攻めてきて、わたしの国と戦おうとするのですか」。四 アンモンの人々の王はエフタの使者に答えた、「昔、イスラエルがエジプトから上つてきたとき、アルノンからヤボクに及び、またヨルダンに及ぶわたしの国を奪い取ったからです。それゆえ今、穏やかにそれを返しなさい」。五 エフタはまた使者をアンモンの人々の王につかわして、六 言わせた、「エフタはこう申します、『イスラエルはモアブの地も、またアンモンの人々の地も取りませんでした。七 イスラエルはエジプトから上つてきたとき、荒野をとおって紅海にいたり、カデシにきました。八 そしてイスラエルは使者をエドムの王につかわして、九 どうぞ、われわれにあなたの国を通らせてください』と言われましたが、エドムの王は聞きいれませんでした。また同じように人をモアブの王につかわしたが、彼も承諾しなかった。それで、イスラエルはカデシにとどまりました。一〇 それから荒野をとおって、エドムの地とモ

アブの地を回り、モアブの地の東部に達し、アルノンの向こうに宿営しましたがモアブの領域には、はいりませんでした。アルノンはモアブの境だからです。^{二九}次にイスラエルはヘシボンの王すなわちアモリびとの王シホンに使者をつかわし、シホンに向かつて「どうぞ、われわれにあなたの国をとおって、われわれの目的地へ行かせてください」と言わせました。^{三〇}ところがシホンはイスラエルを信ぜず、その領域を通らせないばかりか、かえってすべての民を集めてヤハツに陣を取り、イスラエルと戦いました。が、ニイスラエルの神、主はシホンとそのすべての民をイスラエルの手にわたされたので、イスラエルは彼らを撃ち破つて、その土地に住んでいたアモリびとの地をことごとく占領し、ニアルノンからヤボクまでと、荒野からヨルダンまで、アモリびとの領域をことごとく占領しました。^{三一}このようにイスラエルの神、主はその民イスラエルの前からアモリびとを追ひ払われたのに、あなたはそれを取ろうとするのですか。^{三二}あなたは、あなただの神ケモシがあなたに取らせるものを取らないのですか。われわれはわれわれの神、主がわれわれの前から追ひ払われたものの土地を取るのです。^{三三}あなたはモアブの王チツポルの子バラクにまさる者ですか。バラクはかつてイスラエルと争ったことがありますか。かつて彼らと戦ったことがありますか。^{三四}イスラエルはヘシボンとその村里に住み、またアロエルとその村里およびア

ルノンの岸に沿うすべての町々に住むこと三百年になります。あなたがたはどうしてその間にそれを取りもどさなかったのですか。^{三五}わたしはあなたに何も悪い事をしたこともないのに、あなたはわたしと戦つて、わたしに害を加えようとします。審判者であられる主よ、どうぞ、きよう、イスラエルの人々とアンモンの人々との間をおさばしてください。^{三六}しかしアンモンの人々の王はエフタが言いつかわした言葉をききいれなかった。^{三七}時に主の霊がエフタに臨み、エフタはギレアドおよびマナセをとおって、ギレアドのミツパに行き、ギレアドのミツパから進んでアンモンの人々のところに行つた。^{三八}エフタは主に誓願を立てて言った、「もしあなたがアンモンの人々をわたしの手にわたされるならば、わたしはアンモンの人々に勝つて帰るときに、わたしの家の戸口から出てきて、わたしを迎えるものはだれでも主のものとし、その者を燔祭としてささげましょう。^{三九}エフタはアンモンの人々のところに進んで行って、彼らと戦つたが、主は彼らをエフタの手にわたされたので、^{四〇}アロエルからミンニテの附近まで、二十の町を撃ち敗り、アベル・ケラミムに至るまで、非常に多くの人を殺した。こうしてアンモンの人々はイスラエルの人々の前に攻め伏せられた。^{四一}やがてエフタはミツパに帰り、自分の家に来ると、彼の娘が鼓をもち、舞い踊つて彼を出迎えた。彼女はエ

フタのひとり子で、ほかに男子も女子もなかった。三エフタは彼女を見ると、衣を裂いて言った、「ああ、娘よ、あなたは全くわたしを打ちのめした。わたしを悩ますものとなった。わたしが主に誓ったのだから改めることはできないのだ」。三娘は言った、「父よ、あなたは主に誓われたのですから、主があなたのために、あなたの敵アンモンの人々に報復された今、あなたが言われたとおりわたしにしてください」。三娘はまた父に言った、「どうぞ、この事をわたしにさせてください。すなわち二か月の間わたしをゆるし、友だちと一緒に行って、山々をゆきめぐり、わたしの処女であることを嘆かせてください」。三エフタは「行きなさい」と言って、彼女を二か月の間、出してやった。彼女は友だちと一緒に行って、山の上で自分の処女であることを嘆いたが、三二か月の後、父のもとに帰ってきたので、父は誓った誓願のおりに彼女におこなった。彼女はついに男を知らなかった。四これによって年々イスラエルの娘たちは行って、年に四日ほどギレアデびとエフタの娘のために嘆くことがイスラエルのならわしとなった。

第一二章

エフタイムの人々は集まってザボンに行き、エフタに言った、「なぜあなたは進んで行ってアンモンの人々と戦いながら、われわれを招いて一緒に行かせませんでしたか。われわれはあなたの家に火をつけてあなたを一緒に焼いてしまいます」。エフタは彼らに

言った、「かつてわたしとわたしの民がアンモンの人々と大いに争ったとき、あなたがたを呼んだが、あなたがたはわたしを彼らの手から救ってくれませんでした。三あなたがたが救ってくれないのを見たから、わたしは命がけでアンモンの人々のところへ攻めて行きますと、主は彼らをわたしの手にわたされたのです。どうしてあなたがたは、きょう、わたしのところに上ってきて、わたしと戦おうとするのですか」。四そこでエフタはギレアデの人々をことごとく集めてエフタイムと戦い、ギレアデの人々はエフタイムを撃ち破った。これはエフタイムが「ギレアデびとよ、あなたがたはエフタイムとマナセのうちにいるエフタイムの落人だ」と言ったからである。五そしてギレアデびとはエフタイムに渡るヨルダンの渡し場を押えたので、エフタイムの落人が「渡らせてください」と言うとき、ギレアデの人々は「あなたはエフタイムびとですか」と問い、その人がもし「そうではありません」と言うならば、六またその人に「では『シボレテ』と言ってごらんさい」と言い、その人がそれを正しく発音することができないで「セボレテ」と言うときは、その人を捕えて、ヨルダンの渡し場で殺した。その時エフタイムびとの倒れたものは四万二千人であった。

七エフタは六年の間イスラエルをさばいた。ギレアデびとエフタはついに死んで、ギレアデの自分の町に葬られた。

ハ彼の後にベツレヘムのイブザンがイスラエルをさばいた。彼に三十人のむすこがあった。また三十人の娘があつたが、それを自分の氏族以外の者にとつがせ、むすこたちのためには三十人の娘をほかからめとつた。彼は七年の間イスラエルをさばいた。○イブザンはついに死んで、ベツレヘムに葬られた。

二彼の後にゼブルンびとエロンがイスラエルをさばいた。彼は十年の間イスラエルをさばいた。三ゼブルンびとエロンはついに死んで、ゼブルンの地のアヤロンに葬られた。

三彼の後にピラトンびとヒレルの子アブドンがイスラエルをさばいた。四彼に四十人のむすこ及び三十人の孫があり、七十頭のろばに乗った。彼は八年の間イスラエルをさばいた。五ピラトンびとヒレルの子アブドンはついに死んで、エフライムの地のアマレクびとの山地にあるピラトンに葬られた。

第一 三章 イスラエルの人々がまた主の前に悪を行つたので、主は彼らを四十年の間ペリシテびとの手にわたされた。

三ここにダンびとの氏族の者で、名をマノアというゾラの人があつた。その妻はうまずめで、子を産んだことがなかった。三主の使がその女に現れて言った、「あなたはうまずめで、子を産んだことがありません。しかし、あなたは身ごもつて男の子を産むでしょう。四それであ

なたは氣をつけて、ぶどう酒または濃い酒を飲んではいけません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。五あなたは身ごもつて男の子を産むでしょう。その頭にかみそりをあててはなりません。その子は生れた時から神にささげられたナジルびとです。彼はペリシテびとの手からイスラエルを救ひ始めるでしょう。六そこでその女はきて夫に言った、「神の人がわたしのところにきました。その顔かたちは神の使の顔かたちのようで、たいそう恐ろしいうございました。わたしはその人が、どこからきたのか尋ねませんでした。その人もわたしに名を告げませんでした。七しかしその人はわたしに『あなたは身ごもつて男の子を産むでしょう。それであなたはぶどう酒または濃い酒を飲んではいけません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。その子は生れた時から死ぬ日まで神にささげられたナジルびとです』と申しました」。

八そこでマノアは主に願ひ求めて言った、「ああ、主よ、どうぞ、あなたがさきにつかわされた神の人をもう一度わたしたちに臨ませて、わたしたちがその生れる子になすべきことを教えさせてください」。九神がマノアの願ひを聞かれたので、神の使は女が畑に座していた時、ふたたび彼女に臨んだ。しかし夫マノアは一緒にいなかった。一〇女は急ぎ走って行って夫に言った、「さきごろ、わたしに臨まれた人がまたわたしに現れました」。二マノ

アは立つて妻のあとについて行き、その人のもとに行つて言った、「あなたはかつてこの女にお告げになったおかたですか」。その人は言った、「そうです」。三マノアは言った、「あなたの言われたことが事実となったとき、その子の育て方およびこれになすべき事はなんでしょうか」。三主の使はマノアに言った、「わたしがさきに女に言ったことは皆、守らせなければなりません。四すなわちぶどうの木から産するものはすべて食べてはなりません。またぶどう酒と濃い酒を飲んではいけません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。わたしが彼女に命じたことは皆、守らせなければなりません」。

五マノアは主の使に言った、「どうぞ、わたしたちに、あなたを引き留めさせ、あなたのために子やぎを備えさせてください」。六主の使はマノアに言った、「あなたがわたしを引き留めても、わたしはあなたの食物をたべません。しかしあなたが燔祭を備えようとなさるのであれば、主にそれをささげなさい」。マノアは彼が主の使であるのを知らなかつたからである。七マノアは主の使に言った、「あなたの名はなんといいますか。あなたの言われたことが事実となったとき、わたしたちはあなたをあがめましょう」。八主の使は彼に言った、「わたしの名は不思議です。どうしてあなたはそれをたずねるのですか」。九そこでマノアは子やぎと素祭とをとり、岩の上でそれを主にささげた。主は不思議なことをされ、マノアとそ

の妻はそれを見た。二〇すなわち炎が祭壇から天にあがったとき、主の使は祭壇の炎のうちにあってのぼった。マノアとその妻は見て、地にひれ伏した。

三主の使はふたたびマノアとその妻に現れなかつた。その時マノアは彼が主の使であつたことを知つた。四マノアは妻に向かつて言った、「わたしたちは神を見たから、きつと死ぬであらう」。五妻は彼に言った、「主がもし、わたしたちを殺そうと思われたのなら、わたしたちの手から燔祭と素祭をおうけにならなかつたでしょう。またこれらのすべての事をわたしたちにお示しになるはずはなく、また今わたしたちにこのような事をお告げにならなかつたでしょう」。六やがて女は男の子を産んで、その名をサムソンと呼んだ。その子は成長し、主は彼を恵まれた。七主の霊はゾラとエシタオルの間のマヘネダンにおいて初めて彼を感動させた。

第一四章 サムソンはテムナに下つて行き、ペ

リシテびとの娘で、テムナに住むひとりの女を見た。八彼は帰つてきて父母に言った、「わたしはペリシテびとの娘で、テムナに住むひとりの女を見ました。彼女をめぐつてわたしの妻にしてください」。九父母は言った、「あなたが行って、割礼をうけないペリシテびとのうちから妻を迎えようとするのは、身内の娘たちのうちに、あるいはわたしたちのすべての民のうちに女がないためなのですか」。しかしサムソンは父に言った、「彼女をわたしにめ

とってください。彼女はわたしの心にかないますから」。父母はこの事が主から出たものであることを知らなかった。サムソンはベリシテびとを攻めようと、おりをうかがっていたからである。そのころベリシテびとはイスラエルを治めていた。

五かくてサムソンは父母と共にテムナに下って行った。

彼がテムナのおどろ畑に着くと、一頭の若いししがほえたけつて彼に向かってきた。六時に主の霊が激しく彼に臨んだので、彼はあたかも子やぎを裂くようにそのししを裂いたが、手にはなんの武器も持っていなかった。しかしサムソンはそのしたことを父にも母にも告げなかった。七サムソンは下って行って女と話し合ったが、女はサムソンの心になかった。八日がたつて後、サムソンは彼女をめぐろうとして帰ったが、道を転じて、かのししのしかばねを見ると、ししのからだに、はちの群れと、蜜があった。九彼はそれをかきあつめ、手にとつて歩きながら食べ、父母のもとに帰って、彼らに与えたので、彼らもそれを食べた。しかし、ししのからだからその蜜をかきあつめたことは彼らに告げなかった。

一〇そこで父が下って、女のもとに行ったので、サムソンはそこにふるまいを設けた。そうすることは花婿のならわしであつたからである。二人々はサムソンを見ると、三十人の客を連れてきて、同席させた。三サムソンは彼らに言った、「わたしはあなたがたに一つのなぞを出しま

しょう。あなたがたがもし七日のふるまいのうちにそれを解いて、わたしに告げることができたなら、わたしはあなたがたに亜麻の着物三十と、晴れ着三十をさしあげましょう。三しかしあなたがたが、それをわたしに告げることができなければ、亜麻の着物三十と晴れ着三十をわたしにくれなければなりません」。彼らはサムソンに言った、「なぞを出しなさい。わたしたちはそれを聞きましよう」。四サムソンは彼らに言った、**「食らう者から食い物が出、飲む者から飲み物が出、強ひ者から甘い物が出た」。**

五四日目になつて、彼らはサムソンの妻に言った、「あなたの夫を説きすすめて、なぞをわたしたちに明かすようにしてください。そうしなければ、わたしたちは火をつけてあなたとあなたの父の家を焼いてしまいます。あなたはわたしたちの物を取るために、わたしたちを招いたのですか」。六そこでサムソンの妻はサムソンの前に泣いて言った、「あなたはただわたしを憎むだけで、愛してくれません。あなたはわたしの国の人々になぞを出して、それをわたしに解き明かしませんでした」。サムソンは彼女に言った、「わたしは自分の父にも母にも解き明かさなかった。どうしてあなたに解き明かせよう」。七彼女は七日のふるまいの間、彼の前に泣いていたが、七日目になつて、サムソンはついに彼女に解き明かした。ひ

どく彼に迫ったからである。そこで彼女はなぞを自分の国の人々にあかした。一八七日目になって、日の没する前に町の人々はサムソンに言った、

「蜜より甘いものに何があるう。」

ししより強いものに何があるう。」

サムソンは彼らに言った、

「わたしの若い雌牛で耕さなかったなら、わたしは解けなかった。」

この時、主の霊が激しくサムソンに臨んだので、サムソンはアシケロンに下って行って、その町の者三十人を殺し、彼らからはぎ取って、かのなぞを解いた人々に、その晴れ着を与え、激しく怒って父の家に帰った。二〇サムソンの妻は花婿付添人であった客の妻となった。

第一五章 一日がたつて後、麦刈の時にサムソン

は子やぎを携えて妻をおとずれ、「へやにはいつて、妻に会いましょう」と言ったが、妻の父ははいることを許さなかった。二そして父は言った、「あなたが確かに彼女をさらったに相違ないと思ったので、わたしは彼女をあなたの客であった者にやりました。彼女の妹は彼女よりもきれいでありませんか。どうぞ、彼女の代りに妹をめぐってください。」サムソンは彼らに言った、「今度はわたしはペリシテびとに害を加えても、彼らのことでは、わたしに罪がない。」そこでサムソンは行って、きつね三百匹を捕え、たいまつをとり、尾と尾をあわせて、そ

の二つの尾の間に一つのたいまつを結びつけ、たいまつに火をつけて、そのきつねをペリシテびとのまだ刈らない麦の中に放し入れ、そのたばね積んだものと、まだ刈らないものとを焼き、オリブ畑をも焼いた。六ペリシテびとは言った、「これはだれのしわざか。」人々は言った、「テムナびとの婿サムソンだ。そのしゅうとがサムソンの妻を取り返して、その客であった者に与えたからだ。」そこでペリシテびとは上ってきて彼女とその父の家を火で焼き払った。七サムソンは彼らに言った、「あなたがたがそんなことをするならば、わたしはあなたがたに仕返しせずにはおかない。」八そしてサムソンは彼らを下って行って、エタムの岩の裂け目に住んでいた。

九そこでペリシテびとは上ってきて、ユダに陣を取り、レヒを攻めたので、一〇ユダの人々は言った、「あなたがたはどうしてわれわれのところを攻めようと思ったのですか。」彼らは言った、「われわれはサムソンを縛り、彼がわれわれにしたように、彼にするために上ってきたのです。」二そこでユダの人々三千人がエタムの岩の裂け目の下って行って、サムソンに言った、「ペリシテびとはわれわれの支配者であることをあなたは知らないのですか。あなたはこうしてわれわれにこんな事をしたのですか。」サムソンは彼らに言った、「彼らがわたしにしたように、わたしは彼らにしたのです。」三彼らはまたサム

ソンに言った、「われわれはあなたを縛って、ペリシテびとの手にわたすために下ってきたのです」。サムソンは彼らに言った、「あなたがた自身はわたしを撃たないということを誓いなさい」。二三 彼らはサムソンに言った、「いや、われわれはただ、あなたを縛って、ペリシテびとの手にわたすだけです。決してあなたを殺しません」。彼らは二本の新しい綱をもって彼を縛って、岩からひきあげた。

二四 サムソンがレヒにきたとき、ペリシテびとは声をあげて、彼に近づいた。その時、主の霊が激しく彼に臨んだので、彼の腕にかかっていた綱は火に焼けた亜麻のようになつて、そのなわめが手から解けて落ちた。二五 彼はろばの新しいあご骨一つを見つけたので、手を伸べて取り、それをもって一千人を打ち殺した。二六 そしてサムソンは言った、

「ろばのあご骨をもって山また山を築き、ろばのあご骨をもって一千人を打ち殺した」。

二七 彼は言い終ると、その手からあご骨を投げすてた。これのためにその所は「あご骨の丘」と呼ばれた。

二八 時に彼はひどくかわきを覚えたので、主に呼ばわつて言った、「あなたはしもべの手をもって、この大きな救を施されたのに、わたしは今、かわいて死に、割礼をうけないものの手に陥ろうとしています」。二九 そこで神はレヒにあるくぼんだ所を裂かれたので、そこから水が流

れ出た。サムソンがそれを飲むと彼の霊はもとにかえつて元気づいた。それでその名を「呼ばわった者の泉」と呼んだ。これは今日までレヒにある。三〇 サムソンはペリシテびとの時代に二十年の間イスラエルをさばいた。

第一六章 サムソンはガザへ行つて、そこでひとりの遊女を見、その女のところにはいった。三一 サムソンがここにきたと、ガザの人々に告げるものがあつたので、ガザの人々はその所を取り囲み、夜通し町の門で待ち伏せし、「われわれは朝まで待つて彼を殺そう」と言つて、夜通し静かにしていた。三二 サムソンは夜中まで寝たが、夜中に起きて、町の門のとびらと二つの門柱に手をかけて、貫の木もろともに引き抜き、肩に載せて、ヘブロンのかいにある山の頂に運んで行った。

四 この後、サムソンはソレクの谷にいたデリラという女を愛した。三五 ペリシテびとの君たちはその女のところにきて言つた、「あなたはサムソンを説きすすめて、彼の大力はどこにあるのか、またわれわれはどうすれば彼に勝つて、彼を縛り苦しめることができるかを見つけないか。そうすればわれわれはおの銀千百枚ずつをあなたにさしあげましょう」。三六 そこでデリラはサムソンに言つた、「あなたの大力はどこにあるのか、またどうすればあなたを縛って苦しめることができるか、どうぞわたしに聞かせてください」。三七 サムソンは女に言つた、「人々がもし、かわいたことのない七本の新しい弓弦をもって

わたしを縛るなら、わたしは弱くなつてほかの人のようになるでしょう。そこでペリシテびとの君たちが、かわいたことのない七本の新しい弓弦を女に持ってきたので、女はそれをもつてサムソンを縛った。女はかねて奥のへやに人を忍ばせておいて、サムソンに言った、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」。しかしサムソンはその弓弦を、あたかも亜麻糸が火にあつて断たれるように断ち切った。こうして彼の力の秘密は知れなかった。

「デリラはサムソンに言った、『あなたはわたしを欺いて、うそを言いました。どうしたらあなたを縛ることができるか、どうぞ今わたしに聞かせてください』。二サムソンは女に言った、『もし人々がまだ用いたことのない新しい綱をもつて、わたしを縛るなら、弱くなつてほかの人のようになるでしょう』。三そこでデリラは新しい綱をとり、それをもつて彼を縛り、そして彼に言った、『サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています』。時に人々は奥のへやに忍んでいたが、サムソンはその綱を糸のように腕から断ち落した。

「三そこでデリラはサムソンに言った、『あなたは今まで、わたしを欺いて、うそを言いましたが、どうしたらあなたを縛ることができるか、わたしに聞かせてください』。彼は女に言った、『あなたがもし、わたしの髪の毛七ふさを機の縦糸と一緒に織つて、くぎでそれを留めて

おくならば、わたしは弱くなつてほかの人のようになるでしょう』。そこで彼が眠つたとき、デリラはサムソンの髪の毛、七ふさをとつて、それを機の縦糸に織り込み、『くぎでそれを留めておいて、彼に言った、『サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています』。しかしサムソンは目をさまして、くぎと機と縦糸とを引き抜いた。

「五そこで女はサムソンに言った、『あなたの心がわたしを離れてゐるのに、どうして『おまえを愛する』と言うことができるか。あなたはすでに三度もわたしを欺き、あなたの大力がどこにあるかをわたしに告げませんでした』。六女は毎日その言葉をもつて彼に迫り促したので、彼の魂は死ぬばかりに苦しんだ。七彼はついにその心をことごとく打ち明けて女に言った、『わたしの頭にはかみそりを当てたことがあります。わたしは生れた時から神にささげられたナジルびとだからです。もし髪をそり落されたなら、わたしの力は去つて弱くなり、ほかの人のようになるでしょう』。

「八デリラはサムソンがその心をことごとく打ち明けたのを見、人をつかわしてペリシテびとの君たちを呼んで言った、『サムソンはその心をことごとくわたしに打ち明けてましたから、今度こそ上つておいでなさい』。そこでペリシテびとの君たちは、銀を携えて女のもとに上つてきた。九女は自分のひざの上にサムソンを眠らせ、人を呼んで髪の毛、七ふさをそり落させ、彼を苦しめ始めた

が、その力は彼を去っていた。二〇そして女が「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」と言ったので、彼は目をさまして言った、「わたしはいつものように出て行って、からだをゆするう」。彼は主が自分を去らせたことを知らなかった。三そこでペリシテびとは彼を捕えて、両眼をえぐり、ガザに引いて行って、青銅の足かせをかけて彼をつないだ。こうしてサムソンは獄屋の中で、うすをひいていたが、三その髪の毛はそり落された後、ふたたび伸び始めた。

三三さてペリシテびとの君たちは、彼らの神ダゴンに大なる犠牲をささげて祝をしようと、共に集まって言った、「われわれの神は、敵サムソンをわれわれの手にわたされた」。民はサムソンを見て、自分たちの神をほめたたえて言った、「われわれの神は、われわれの国を荒し、われわれを多く殺した敵をわれわれの手にわたされた」。二五彼らはまた心に喜んで言った、「サムソンを呼んで、われわれのために戯れ事をさせよう」。彼らは獄屋からサムソンを呼び出して、彼らの前に戯れ事をさせた。彼らがサムソンを柱のあいだに立たせると、二六サムソンは自分の手をひいている若者に言った、「わたしの手を放して、この家をささえている柱をさぐらせ、それに寄りかからせてください」。二七その家には男女が満ち、ペリシテびとの君たちも皆そこにいた。また屋根の上には三千人ばかりの男女がいて、サムソンの戯れ事をするのを見

ていた。

二八サムソンは主に呼ばわって言った、「ああ、主なる神よ、どうぞ、わたしを覚えてください。ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、わたしの二つの目の一つのためにでもペリシテびとにあだを報いさせてください」。二九そしてサムソンは、その家をささえている二つの中柱の一つを右の手に、一つを左の手にかかえて、身をそれに寄せ、三〇「わたしはペリシテびとと共に死のう」と言って、力をこめて身をかがめると、家はその中にいた君たちと、すべての民の上に倒れた。こうしてサムソンが死ぬときに殺したものは、生きていたときに殺したものよりも多かった。三やがて彼の身内の人たちおよび父の家族の者がみな下ってきて、彼を引き取り、携え上って、ゾラとエシタオルの間にある父マノアの墓に葬った。サムソンがイスラエルをさばいたのは二十年であつた。

第一章 ここにエフライムの山地の人で、名をミカと呼ぶものがあつた。二彼は母に言った、「あなたはかつて銀千百枚を取られたので、それをのろい、わたしにも話されましたが、その銀はわたしが持っています。わたしがそれを取ったのです」。母は言った、「どうぞ主がわが子を祝福されますように」。三そして彼が銀千百枚を母に返したので、母は言った、「わたしはわたしの子のために一つの刻んだ像と、一つの鑄た像を造るためにそ

の銀をわたしの手から主に献納します。それで今それをあなたに返しましょう。四ミカがその銀を母に返したので、母はその銀二百枚をとって、それを銀細工人に与え、一つの刻んだ像と、一つの鑄た像を造らせた。その像はミカの家にあった。五このミカという人は神の宮をもち、エポデとテラピムを造り、その子のひとりを立てて、自分の祭司とした。六そのころイスラエルには王がなかった。人々はおのおの自分たちの目に正しいと思うことを行った。

七そこでここにユダの氏族のもので、ユダのベツレヘムからきたひとりの若者があった。彼はレビびとであつて、そこに寄留していたのである。八この人は自分の住むべきところを尋ねて、ユダのベツレヘムの町を去り、旅してエフライムの山地のミカの家にきた。九ミカは彼に言った、「あなたはどこからおいでになりましたか」。彼は言った、「わたしはユダのベツレヘムのレビびとですが、住むべきところを尋ねて旅をしているのです」。一〇ミカは言った、「わたしと一緒にいて、わたしのために父とも祭司ともなつてください。そうすれば年に銀十枚と衣服ひとそろいと食物とをさしあげましょう」。二レビびとはついにその人と一緒に住むことを承諾した。そしてその若者は彼の子のひとりのようになつた。三ミカはレビびとであるこの若者を立てて自分の祭司としたので、彼はミカの家にいた。四それでミカは言った、「今わたし

はレビびとを祭司に持つようになったので、主がわたしをお恵みくださることがわかりました」。

第一章

一そのころイスラエルには王がなかった。そのころダンびとの部族はイスラエルの部族のうちにあつて、その日までまだ嗣業の地を得なかつたので自分たちの住むべき嗣業の地を求めていた。二それでダンの人々は自分の部族の総勢のうちから、勇者五人をゾラとエシタオルからつかわして土地をうかがい探らせた。すなわち彼らに言った、「行って土地を探すべきなさい」。彼らはエフライムの山地に行き、ミカの家に着いて、そこに宿ろうとした。三彼らがミカの家に近づいたとき、レビびとである若者の声を聞きわけたので、身をめぐらしてそこにはいつて彼に言った、「だれがあなたをここに連れてきたのですか。あなたはここで何をしていますのですか。ここになんの用があるのですか」。四若者は彼らに言った、「ミカが、かようかようにしてわたしを雇つたので、わたしはその祭司となつたのです」。五彼らは言った、「どうぞ、神に伺つて、われわれが行く道にしあわせがあるかどうかを知らせてください」。六その祭司は彼らに言った、「安心して行きなさい。あなたがたが行く道は主が見守つておられます」。

七そこで五人の者は去つてライシに行き、そこにいる民を見ると、彼らは安らかに住まい、その穏やかで安らかなことシドンびとのもようであつて、この国には一つと

して欠けたものがなく、富を持ち、またシドンびとと遠く離れており、ほかの民と交わることがなかった。八かくて彼らがゾラとエシタオルにおける兄弟たちのもとに帰ってくる、兄弟たちは彼らに言った、「いかがでしたか」。彼らは言った、「立って彼らのところに攻め上りました。う。われわれはかの地を見たが、非常に豊かです。あなたがたはなぜじっとしているのですか。ためらわずに進んで行って、かの地を取りなさい。九あなたがたが行けば、安らかにいる民の所に行くでしょう。その地は広く、神はそれをあなたがたの手に賜わるのです。そこには地にあるもの一つとして欠けているものはありません。二

そこでダン氏族のものが六百人が武器を帯びて、ゾラとエシタオルを出発し、三上って行ってユダのキリアテ・ヤリムに陣を張った。このゆえに、その所は今日までマハネダンと呼ばれる。それはキリアテ・ヤリムの西にある。四彼らはそこからエフライムの山地に進み、ミカの家に着いた。五かのライシの国をうかがいに行った五人の者はその兄弟たちに言った、「あなたがたはこれらの家にエポデとテラビムと刻んだ像と鑄た像のあるのを知っていますか。それであなたがたは今、なすべきことを決めなさい。六そこで彼らはその方へ身をめぐらして、かのレビびとの若者の家すなわちミカの家に行つて、彼に安否を問うた。七しかし武器を帯びた六百人のダンの人々は

門の入口に立っていた。八かの土地をうかがいに行った五人の者は上つて行って、そこにはいり、刻んだ像とエポデとテラビムと鑄た像とを取ったが、祭司は武器を帯びた六百人の者と共に門の入口に立っていた。九彼らがミカの家にはいつて刻んだ像とエポデとテラビムと鑄た像とを取った時、祭司は彼らに言った、「あなたがたは何をなさいますか」。一〇彼らは言った、「黙りなさい。あなたの手を口にあてて、われわれと一緒にきて、われわれのために父とも祭司ともなりなさい。ひとりの家の祭司であるのと、イスラエルの一族、一氏族の祭司であるのと、どちらがよいですか」。二祭司は喜んで、エポデとテラビムと刻んだ像とを取り、民のなかに加わった。

三かくて彼らは身をめぐらして去り、その子供たちと家畜と貨財をさきにたてて進んだが、四ミカの家をはるかに離れたとき、ミカは家に近い家の人々を集め、ダンの人々に追いつき、五ダンの人々を呼んだので、彼らはふり向いてミカに言った、「あなたがたのように仲間を連れてきたのは、どうしたのですか」。六彼は言った、「あなたがたが、わたしの造った神々および祭司を奪い去ったので、わたしに何が残っていますか。しかるにあなたがたがわたしに向かつて『どうしたのですか』と言われるとは何事ですか」。七ダンの人々は彼に言った、「あなたは大きな声を出さないがよい。気の荒い連中があなたに撃ちかかって、あなたは自分の命と家族の命を失うよ

うになるでしよう」。^{二六}こうしてダンの人々は去って行ったが、ミカは彼らの強いのを見て、くびすをかえして自分の家に帰った。

ミカは彼らはミカが造った物と、ミカと共にいた祭司とを奪ってライシにおもむき、穏やかで、安らかな民のところへ行つて、つるぎをもつて彼らを撃ち、火をつけてその町を焼いたが、^{二八}シドンを遠く離れており、ほかの民との交わりがなかったので、それを救うものがなかった。その町はベテレホブに属する谷にあった。彼らは町を建てなおしてそこに住み、^{二九}イスラエルに生れた先祖ダンの名にしたがって、その町の名をダンと名づけた。その町の名はもとはライシであった。^{三〇}そしてダンの人々は刻んだ像を自分たちのために安置し、モーセの孫すなわちゲルシヨムの子ヨナタンとその子孫がダンびとの部族の祭司となつて、国が捕囚となる日にまで及んだ。ミカの家がシロにあつたあいだ、常に彼らはミカが造つたその刻んだ像を飾つて置いた。

第一章

そのころ、イスラエルに王がなかつた時、エフライムの山地の奥にひとりのレビびとが寄留していた。彼はユダのベツレヘムからひとりの女を迎えて、めかけとしていたが、^二そのめかけは怒つて、彼のところを去り、ユダのベツレヘムの父の家に帰つて、そこに四か月ばかり過ごした。^三そこで夫は彼女をなだめて連れ帰ろうと、しもべと二頭のろばを従え、立つて彼

女のあとを追つて行つた。彼が女の父の家に着いた時、娘の父は彼を見て、喜んで迎えた。^四娘の父であるしゅうとが引き留めたので、彼は三日共におり、みな飲み食いしてそこに宿つた。^五四日目に彼らは朝はやく起き、彼が立ち去ろうとしたので、娘の父は婿に言つた、「少し食事をして元氣をつけ、それから出かけなさい」。^六そこでふたりは座して共に飲み食いしたが、娘の父はその人に言つた、「どうぞもう一晚泊まって楽しく過ごささい」。^七その人は立つて去ろうとしたが、しゅうとがしいたので、ついにまたそこに宿つた。^八五日目になつて、朝はやく起きて去ろうとしたが、娘の父は言つた、「どうぞ、元氣をつけて、日が傾くまでとどまりなさい」。^九そこで彼らふたりは食事をした。その人がついにめかけおよびしもべと共に去ろうとして立ちあがったとき、娘の父であるしゅうとは彼に言つた、「日も暮れようとしてゐる。どうぞもう一晚泊まりなさい。日は傾いた。ここに宿つて楽しく過ごささい。そしてあしたの朝はやく起きて出立し、家に帰りなさい」。

しかし、その人は泊まることを好まないで、立つて去り、エブスすなわちエルサレムの向かいに着いた。くらをおいた二頭のろばと彼のめかけも一緒であつた。^二彼らがエブスに近づいたとき、日はすでに没したので、しもべは主人に言つた、「さあ、われわれは道を転じてエブスびとのこの町にはいつて、そこに宿りましよう」。

三主人は彼に言った、「われわれは道を転じて、イスラエルの人々の町でない外国人の町に、はいつてはならない。ギベアまで行こう」。二彼はまたしもべに言った、「さあ、われわれはギベアかママか、そのうちの一つに着いてそこに宿ろう」。四彼らは進んで行ったが、ベニヤミンに属するギベアの近くで日が暮れたので、五ギベアへ行つて宿ろうと、そこに道を転じ、町にはいつて、その広場に座した。だれも彼らを家に迎えて泊めてくれる者がなかったからである。

六時にひとりの老人が夕暮に畑の仕事から帰つてきた。この人はエフライムの山地の者で、ギベアに寄留していたのである。ただしこの所の人々はベニヤミンびとであった。七彼は目をあげて、町の広場に旅人のおるのを見た。老人は言った、「あなたはどこへ行かれるのですか。どこからおいでになりましたか」。八その人は言った、「われわれはユダのベツレヘムから、エフライムの山地の奥へ行くものです。わたしはあそこの者で、ユダのベツレヘムへ行き、今わたしの家に帰るところですが、だれもわたしを家に泊めてくれる者がありません。一九われわれには、ろばのわらも飼葉もあり、またわたしは、はしためと、しもべと共にいる若者との食物も酒もあつて、何も欠けているものはありません。二〇老人は言った、「安心しなさい。あなたの必要なものはなんでも備えましょう。ただ広場で夜を過ごしてはなりません。二一そ

して彼を家に連れていつて、ろばに飼葉を与えた。彼らは足を洗つて飲み食いした。

二二彼らが楽しく過ごしていた時、町の人々の悪い者どもがその家を取り囲み、戸を打ちたたいて、家のあるじである老人に言った、「あなたの家にきた人を出しなさい。われわれはその者を知るのである」。二三しかし家のあるじは彼らのところに出ていつて言った、「いいえ、兄弟たちよ、どうぞ、そんな悪いことをしないでください。この人はすでにわたしの家にはいつたのだから、そんなつまらない事をしないでください。二四ここに処女であるわたしの娘と、この人のめかけがいます。今それを出しますから、それをはずかしめ、あなたがたの好きなようにしなさい。しかしこの人にはそのようにつまらない事をしないでください。二五しかし人々が聞きいれなかったので、その人は自分のめかけをとつて彼らのところに出した。彼らはその女を犯して朝まで終夜はずかしめ、目ののぼるころになって放し帰らせた。二六朝になって女は自分の主人を宿してくれた人の家の戸口にきて倒れ伏し、夜のあけるまでに及んだ。

二七彼女の主人は朝起きて家の戸を開き、出て旅立とうとすると、そのめかけである女が家の戸口に、手を敷居にかけて倒れていた。二八彼は女に向かつて、「起きよ、行こう」と言つたけれども、なんの答もなかった。そこでその人は女をろばに乗せ、立つて自分の家におもむいた

が、「元その家に着いたとき、刀を執り、めかけを捕えて、そのからだを十二切れに断ち切り、それをイスラエルの全領域にあまねく送った。三〇それを見たものはみな言った、「イスラエルの人々がエジプトの地から上ってきた日から今日まで、このような事は起ったこともなく、また見たこともない。この事をよく考え、協議して言うことを決めよ」。

第二〇章 一そこでイスラエルの人々は、ダンからベエルシバまで、またギレアデの地からもみな出てきて、その会衆はひとりのようにミヅパで主のもとに集まった。二民の首領たち、すなわちイスラエルのすべての部族の首領たちは、みずから神の民の集合に出た。つるぎを帯びている歩兵が四十万人あった。三ベニヤミンの人々は、イスラエルの人々がミヅパに上ったことを聞いた。イスラエルの人々は言った、「どうして、この悪事が起ったのか、われわれに話してください」。四殺された女の夫であるレビびとは答えて言った、「わたしは、めかけと一緒にベニヤミンに属するギベアへ行って宿りましたが、ギベアの人々は立ってわたしを攻め、夜の間に、わたしのおる家を取り囲んで、わたしを殺そうと企て、ついにわたしのめかけをはずかしめて、死なせました。六それでわたしはめかけを捕えて断ち切り、それをイスラエルの嗣業のすべての地方にあまねく送りしました。彼らがイスラエルにおいて憎むべきみだらなことを行った

からです。七イスラエルの人々よ、あなたがたは皆自分の意見とを考えをここに述べてください」。

八民は皆ひとりのように立って言った、「われわれはだれも自分の天幕に行きません。まただれも自分の家に帰りません。九われわれが今ギベアに対してしようとする事はこれです。われわれはくじを引いて、ギベアに攻めのぼりましょう。一〇すなわちイスラエルのすべての部族から百人について十人、千人について百人、万人について千人を選んで、民の糧食をとらせ、民はベニヤミンのギベアに行つて、ベニヤミンびとがイスラエルにおいておこなつたすべてのみだらな事に対して、報復しましょう。二こうしてイスラエルの人々は皆集まり、一致結束して町を攻めようとした。

三イスラエルのもろもろの部族は人々をあまねくベニヤミンの部族のうちにつかわして言わせた、「あなたがたのうちに起つたこの事は、なんたる悪事でしょうか。四それで今ギベアにいるあの悪い人々をわたしなさい。われわれは彼らを殺して、イスラエルから悪を除き去りましょう」。しかしベニヤミンの人々はその兄弟であるイスラエルの人々の言葉を聞きいれなかった。一四かえつてベニヤミンの人々は町々からギベアに集まり、出てイスラエルの人々と戦おうとした。一五その日、町々から集まつたベニヤミンの人々はつるぎを帯びている者二万六千人あり、ほかにギベアの住民で集まつた精兵が七百人

あった。「六このすべての民のうちに左ききの精兵が七百
人あって、いづれも一本の毛すじをねらって石を投げて
も、はずれることがなかった。」「七イスラエルの人々の集
まった者はベニヤミンを除いて、つるぎを帯びている者
四十万人あり、いづれも軍人であった。

「八イスラエルの人々は立ちあがってベテルにのぼり、
神に尋ねた、「われわれのうち、いづれがさききのぼって、
ベニヤミンの人々と戦いましょうか」。主は言われた、
「ユダがさきに」。

「九そこでイスラエルの人々は、朝起きて、ギベアに対
し陣を取った。」「十すなわちイスラエルの人々はベニヤミ
ンと戦うために出て行って、ギベアで彼らに対して戦い
の備えをしたが、二ベニヤミンの人々はギベアから出て
きて、その日イスラエルの人々のうち二万二千人を地に
撃ち倒した。」「三しかしイスラエルの民の人々は奮いたっ
て初めの日に備えをした所にふたたび戦いの備えをし
た。」「四そしてイスラエルの人々は上って行って主の前に
夕暮まで泣き、主に尋ねた、「われわれは再びわれわれの
兄弟であるベニヤミンの人々と戦いを交えるべきでしよ
うか」。主は言われた、「攻めのぼれ」。

「五そこでイスラエルの人々は、次の日またベニヤミン
の人々の所に攻めよせたが、二五ベニヤミンは次の日また
ギベアから出て、これを迎え、ふたたびイスラエルの人
人のうち一万八千人を地に撃ち倒した。これらは皆つる

ぎを帯びている者であった。」「六これがためにイスラエル
のすべての人々すなわち全軍はベテルに上って行って泣
き、その所で主の前に座して、その日夕暮まで断食し、
燔祭と酬恩祭を主の前にささげた。」「七そしてイスラエル
の人々は主に尋ね、「そのころ神の契約の箱はそこに
あって、二アロンの子エレアザルの子であるピネハスが、
それに仕えていた——そして言った、「われわれはなおふ
たたび出て、われわれの兄弟であるベニヤミンの人々と
戦うべきでしょうか。あるいはやめるべきでしょうか」。
主は言われた、「のぼれ。わたしはあす彼らをあなたがた
の手にわたすであらう」。

「八そこでイスラエルはギベアの周囲に伏兵を置き、
三そしてイスラエルの人々は三日目にまたベニヤミンの
人々のところに攻めのぼり、前のようにギベアに対して
備えをした。」「四ベニヤミンの人々は出て、民を迎えたが、
ついに町からおびき出されたので、彼らは前のように大
路で民を撃ちはじめ、また野でイスラエルの人を三十人
ばかり殺した。その大路は、一つはベテルに至り、一つ
はギベアに至るものであった。」「五ベニヤミンの人々は
言った、「彼らは初めのように、われわれの前に撃ち破ら
れる」。しかしイスラエルの人々は言った、「われわれは
逃げて、彼らを町から大路におびき出そう」。」「六そして
イスラエルの人々は皆その所から立ってバアル・タマル
に備えをした。その間に待ち伏せていたイスラエルの人

人がその所から、すなわちゲバの西から現れ出た。三十四
 なわちイスラエルの全軍のうちから精兵一万人がきて、
 ギベアを襲い、その戦いは激しかった。しかしベニヤミ
 ンの人々は災の自分たちに迫っているのを知らなかった。
 三十五主がイスラエルの前にベニヤミンを撃ち敗れたの
 で、イスラエルの人々は、その日ベニヤミンびと二万五
 千一百人を殺した。これらは皆つるぎを帯びている者で
 あった。三十六こうしてベニヤミンの人々は自分たちの撃ち
 敗れたのを見た。

そこでイスラエルの人々はギベアに対して設けた伏兵
 をたのんで、ベニヤミンびとを避けて退いた。三十七伏兵は
 急いでギベアに突き入り、進んでつるぎをもって町をこ
 とごとく撃った。三十八イスラエルの人々と伏兵の間に定め
 た合図は、町から大いなるのろしがあがるとき、三十九イス
 ラエルの人々が戦いに転じることであった。さてベニヤ
 ミンは初めイスラエルの人々を撃って三十人ばかりを殺
 したので言った、「まことに彼らは最初の戦いのようにわ
 れわれの前に撃ち敗れる」。四十しかし、のろしが煙の
 柱となって町からのぼりはじめたので、ベニヤミンの人
 人がうしろを見ると、町はみな煙となって天にのぼって
 いた。四十一その時イスラエルの人々が向きを変えたので、
 ベニヤミンの人々は災が自分たちに迫ったのを見て、う
 ろたえ、四十二イスラエルの人々の前から身をめぐらして荒
 野の方に向かったが、戦いが彼らに追い迫り、町から出

てきた者どもは、彼らの中にはさんで殺した。四十三すなわ
 ちイスラエルの人々はベニヤミンの人々を切り倒し、追
 い撃ち、踏みしめて、ノハから東の方ギベアの向かい
 にまで及んだ。四十四ベニヤミンの倒れた者は一万八千人
 で、みな勇士であった。四十五彼らは身をめぐらして荒野の
 方、リンモンの岩まで逃げたが、イスラエルの人々は大
 路でそのうち五千人を切り倒し、なおも追撃してギドム
 に至り、そのうちの二千人を殺した。四十六こうしてその日
 ベニヤミンの倒れた者はつるぎを帯びている者合わせて
 二万五千人で、みな勇士であった。四十七しかし六百人の者
 は身をめぐらして荒野の方、リンモンの岩まで逃げて、
 四十八四か月の間リンモンの岩に住んだ。四十九そこでイスラエル
 の人々はまた身をかえしてベニヤミンの人々を攻め、つ
 るぎをもって人も獣もすべて見つけたものを撃ち殺し、
 また見つけたすべての町に火をかけた。

第二一章 一かつてイスラエルの人々はミヅバで、
 「われわれのうちひとりもその娘をベニヤミンびとの妻
 として与える者があってはならない」と言って誓ったの
 で、二民はベテルに行つて、そこで夕暮まで神の前に座
 し、声をあげて激しく泣いて、三言つた、「イスラエルの
 神、主よ、どうしてイスラエルにこのような事が起つて、
 今日イスラエルに一つの部族が欠けるようになったので
 すか」。四翌日、民は早く起きて、そこに祭壇を築き、燔
 祭と酬恩祭をささげた。五そしてイスラエルの人々は

言つた、「イスラエルのすべての部族のうちで集会に上つて、主のもとに行かなかつた者はだれか」。これは彼らがミツバにのぼつて、主のもとに行かない者のことについて大いなる誓いを立てて、「その人は必ず殺されなければならぬ」と言つたからである。しかしイスラエルの人々は兄弟ベニヤミンをあわれんで言つた、「今日イスラエルに一つの部族が絶えた。われわれは主をさして、われわれの娘を彼らに妻として与えないと誓つたので、かの残つた者どもに妻をめとらせるにはどうしたらよいであろうか」。

彼らはまた言つた、「イスラエルの部族のうちで、ミツバにのぼつて主のもとに行かなかつたのはどの部族か」ところがヤベシ・ギレアドからはひとりも陣営にきて集會に臨んだ者がなかつた。すなわち民を集めて見ると、ヤベシ・ギレアドの住民はひとりもそこにいなかった。そこで會衆は勇士一万二千人をかしこにつかわし、これに命じて言つた、「ヤベシ・ギレアドに行つて、その住民を、女、子供もろともつるぎをもつて撃て。二そしてこのようにしなければならぬ。すなわち男および男と寝た女はことごとく滅ぼさなければならぬ」。三こうして彼らはヤベシ・ギレアドの住民のうちで四百人の若い処女を獲た。これはまだ男と寝たことがなく、男を知らない者である。彼らはこれをカナンの地にあるシロの陣営に連れてきた。

三そこで全會衆は人をつかわして、リンモンの岩におるベニヤミンの人々に平和を告げた。四ベニヤミンの人がその時、帰つてきたので、彼らはヤベシ・ギレアドの女のうちから生かしておいた女をこれに与えたが、なお足りなかつた。五こうして民は、主がイスラエルの部族のうちに欠陥をつくられたことのために、ベニヤミンをあわれんだ。

六會衆の長老たちは言つた、「ベニヤミンの女が絶えたので、かの残りの者どもに妻をめとらせるにはどうしたらよいでしょうか」。七彼らはまた言つた、「イスラエルから一つの部族が消えうせないためにベニヤミンのうちの残りの者どもに、あとつぎがなければならぬ。八しかし、われわれの娘を彼らの妻に与えることはできない。イスラエルの人々が『ベニヤミンに妻を与える者はのろわれる』と言つて誓つたからである」。九それで彼らは言つた、「年々シロに主の祭がある」。シロはベテルの北にあつて、ベテルからシケムにのぼる大路の東、レバナの南にある。一〇そして彼らはベニヤミンの人々に命じて言つた、「あなたがたは行つて、ぶどう畑に待ち伏せして、三うかがいなさい。もしシロの娘たちが踊りを踊りに出てきたならば、ぶどう畑から出て、シロの娘たちのうちから、めいめい自分の妻をとつて、ベニヤミンの地に連れて行きなさい。三もしその父あるいは兄弟がきて、われわれに訴えるならば、われわれは彼らに、『われわれの

